

序章 本研究の対象と接近方法

本研究は、高句麗都城に関する遺跡、遺物を対象に考古学的に検討し、高句麗都城の特質を把握することをめざす。

高句麗は紀元前 1 世紀頃、中国東北に起こり、次第に領域を南にひろげ、最盛期にはその版図は朝鮮半島中部にまで及んだ。高句麗都城は遷都を基準として前期、中期、後期に区分される（註 1、図 1）。本研究は、中華人民共和国（遼寧省桓仁：前期都城＜紀元前 1 世紀頃～3 世紀初＞、吉林省集安：中期都城＜3 世紀初～427 年＞）、朝鮮民主主義人民共和国（平壤：後期都城＜427～668＞）に所在する遺跡・遺物を中心とした検討を行なう。

高句麗都城研究史をたどると、都城関係遺跡の変遷観、歴史的解釈に見解の相違が著しく、現在も解消されていない。その主な理由は、あつかう遺跡、遺物の年代観がまちまちであることにある。このため、本研究では、遺跡の年代の決め手となる遺物、とくに、中期、後期にかんしては、都城関係遺跡で普遍的に出土する瓦の編年を構築し、考察の基礎とする（註 2）。また、瓦の出現していない前期に関しては土器の年代観をもとに検討する。

研究にあたっては発掘調査による資料を第一とする。第二次大戦以後は、北朝鮮、中国によって都城関係遺跡の発掘がすすみ、とくに近年の世界遺産登録に伴う大規模調査により、調査資料は増大した。とはいえ、第二次大戦前の採集資料も貴重な資料である。考察にあたっては、状況に応じて採集資料の援用をも図る（註 3）。

おわりに、本研究における用語について、述べておく。「都城」の語は、首都の意味で用い、王宮が所在する地ととらえる（註 4）。具体的には高句麗都城を構成する基本的な要素として王宮にくわえて逃げ城としての山城の遺跡の検討が中心となる。ただし、遷都前後の状況も重要であり、首都でない時期も検討範囲に含める。

なお、遺跡名は、原則として、現地で使用されている遺跡名を用いるが、一部の遺跡では、行論の関係上、旧称によった部分がある（註 5）。

また、現在の国家名として北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、中国（中華人民共和国）、韓国（大韓民国）の略称を用いることを断っておきたい。

註

- 1 高句麗都城の時期区分は、田中俊明（田中 1995）による。
- 2 高句麗瓦編年は、7 期に大別してあらかず。本文中では単に「瓦編年」と略するばあいがある。
- 3 本研究で用いる採集資料は、『朝鮮古蹟圖譜』、『高句麗時代之遺蹟』、『通溝 卷上』などの図録類掲載の資料が主なものである。掲載資料の採集経緯、収蔵経緯はさまざま、出土地の確実性などの点で資料的には制約があるが、状況によっては採集資料であることを明記して用いる。
- 4 都城研究では、類似の用語として、王都、王城、などの語も用いられる。
- 5 主なものをあげると、山城子山城（現地では丸都山城）、通溝城（現地では国内城）、將軍塚（現地では將軍墳）などである。

参考文献

- 朝鮮総督府 1915 『朝鮮古蹟圖譜 一』、『朝鮮古蹟圖譜 二』
朝鮮総督府 1929 『高句麗時代之遺蹟 圖版上册』（古蹟調査特別報告 第七冊）
池内 宏 1938 『通溝 卷上』日滿文化協會
田中俊明 1995 「前期・中期の王都」「後期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』（東 潮・田中俊明編著）中央公論社

第1章 高句麗考古学研究史

高句麗都城の検討に入る前に、本章で、都城研究を含めた高句麗考古学研究史を概観しておきたい。

高句麗考古学研究史では文献を主とした研究に比べ遺跡の踏査や発掘調査が大きな比重を占める。したがって、研究史は、学説史に限定せずに、遺跡の調査史をも含めたものとして捉えるのが実態に即している(註1)。

本章では、都城の所在地として多くの調査がおこなわれてきた平壤地域、集安・桓仁地域および近年、高句麗遺跡の調査が進展している韓国地域も加えて、高句麗遺跡の調査研究の歩みを概観する。

記述に際しては、①遺跡調査がどのような体制で、どんな遺跡が調査され、調査成果はどのように公表されているか、②遺跡調査の成果として高句麗文化のとらえかたに、大戦前と大戦後とでどのような相違があるかという視点で述べたい(註2)。

第1節 高句麗遺跡調査研究の歩み

1 平壤における遺跡調査

1) 第二次大戦前の遺跡調査

朝鮮半島での遺跡調査の端緒となったのは、1902年、韓国統監府の時期の関野貞による古建築の調査である。関野の調査は、本来、建築遺構に重点をおいたものであったが、実際には木造建築の残るものが極めて少なかったために、石造物や建築遺跡に重点をうつしていった(関野1904)。

1910年の朝鮮総督府設置以降は、その古蹟調査事業として遺跡の調査が行なわれるようになる。関野の先の調査は総督府設置以後の調査の基礎資料となった。

1945年までの平壤における遺跡調査を、調査体制の変遷にしたがって、次の4期に分けて記述する。

- ① 1900年～1910年 韓国統監府
- ② 1910年～1920年 朝鮮総督府古蹟調査委員会
- ③ 1921年～1930年 朝鮮総督府古蹟調査課
- ④ 1931年～1945年 朝鮮古蹟研究会

① 1900年～1910年 韓国統監府

遺跡の踏査が中心であり、一部発掘調査もおこなわれている。八木獎三郎は、1900年から1901年にかけて平壤以南を調査した。石器時代の遺跡が主であったが、一部高句麗時代の遺跡も含まれている。

② 1910年～1920年 朝鮮総督府古蹟調査委員会

この時期は、朝鮮に常駐の調査組織はない。1916年に「古蹟及び遺物保存規則」が制定され、また、「古蹟調査委員会」がもうけられた。その第一年度の調査は、関野を初めとする体制で平壤の楽浪郡時代の遺跡がおこなわれた。以後、日本内地から学者が出張して調査するという体制によって調査が実施された。

この時期の成果は、報告書として『古蹟調査特別報告』、『古蹟調査報告』などがあり、ほかに、図録として『朝鮮古蹟圖譜』がある。これらが調査成果の主なものといえよう。

刊行された成果のうち、高句麗遺跡に関する出版物とその刊行年をあげると、以下のようである。

- ③ 1921年～1930年 朝鮮総督府古蹟調査課
 - 國內城地方 『朝鮮古蹟圖譜 一』 1915
 - 平壤長安城地方 『朝鮮古蹟圖譜 二』 1915

1921年に内務省にもうけられた古蹟調査課が中心となって調査をおこなう体制が整えられた。

古蹟調査課発足以後、調査成果は、年度毎に『古蹟調査報告』が刊行されることになっていた。ところが、古蹟調査課ができたものの、1924年からの行政整理と緊縮財政のあおりを受け古蹟調査は縮小の一途をたどり古蹟調査課も廃止されることになった。折から、1923年から1924年にかけて楽浪古墳群の大規模な盗掘があったが、こうした盗掘による遺跡破壊の後始末すら困難になったという。

この間の調査は楽浪遺跡が主で、高句麗古墳の調査は目立ったものが無いが、出版物には以下の図録があり、高句麗遺跡、遺物に関する多くの基本的な情報が掲載されている。

「高句麗(支那)」『高句麗時代之遺蹟』圖版上 1929
「高句麗城址及古墳」『高句麗時代之遺蹟』圖版下 1930

④ 1931年～1945年 朝鮮古蹟研究会

古蹟調査課が廃止されたあと1931年以降は、朝鮮古蹟研究会による調査となる。この研究会は、黒板勝美の主導により、民間の寄付によって運営され、平壤と慶州に研究所をおき、遺跡の調査にあたることになった。平壤研究所の場合、研究所の実態は、特に建物もなく、平壤府立博物館(開館1933年)に間借りしている状態であったという。また専任の職員は置かず、調査の実施に際しては、総督府博物館の職員、帝室博物館の館員や、東京帝国大学、京都帝国大学、京城帝国大学などの学者が出張して調査を遂行したのであって、この体制は敗戦までかわらなかったという(有光2007、小泉1986)。

この間の平壤およびその付近の高句麗関係の調査遺跡と主要な刊行物をあげると次のようである。

元五里廢寺、晩達山麓の高句麗古墳『昭和十一年度古蹟調査報告』 1937
平壤城の門跡・城壁、古墳『昭和十二年度古蹟調査報告』 1938
清岩里廢寺『昭和十三年度古蹟調査報告』 1940

この間の平壤での調査の主眼は高句麗遺跡よりも楽浪遺跡にあった。この理由として、梅原末治によれば「資金を他から得る関係上、自然とそれに相応ずる成果が望まれたことから、依然調査の対象を慶州と平壤の古墳群に置くの外なかった」(梅原1946)という。この記述における「平壤の古墳群」とは古くあばかれて遺物の少ない高句麗古墳ではなく、燦然とした遺物の多い楽浪古墳群をさしている。

2) 第二次大戦後の遺跡調査

平壤の地の遺跡調査は、大戦後は、北朝鮮による調査に移り、遺跡調査は科學院考古學・民俗學研究所(のち社會科學院考古學研究所)や金日成綜合大學などが行なうようになる。

発掘調査の報告は単行の報告書のほか、『遺蹟發掘報告』(1956年～)、『考古學資料集』(1958年～)、『考古民俗論文集』(1969年～)のシリーズや、『文化遺産』(1957～1962年)、『考古民俗』(1963～1967年)、『朝鮮考古研究』(1986年～)などの雑誌に掲載されている。そのうち、高句麗文化に関連する報告の主なものは次のようである。

平壤駅前古墳 『大同江流域遺蹟調査報告』(『考古學資料集』第1集) 1958
大城山城、安鶴宮址、野外劇場地區第3、6、7、8號墳、高山洞第6、7、10、11號墳
『大城山一帯の高句麗遺蹟に関する研究』(遺蹟發掘報告第9集) 1964
伝東明王陵付近1、4號墳(1958～1960年)

『各地遺蹟整理報告』(『考古學資料集』第3集) 1963
大城山城、安鶴宮址、積石塚2基(大城山城内)、石室封土墳23基(大城山城内3基、植物園内17基、安鶴宮址内3基)

金日成綜合大學『大城山の高句麗遺蹟』金日成綜合大學出版社) 1973
定陵寺、東明王陵及び周辺の高句麗古墳19基

金日成綜合大學『東明王陵とその附近の高句麗遺蹟』金日成綜合大學出版社 1985

このように、北朝鮮による調査では、壁画古墳の調査が目立つが、高句麗都城関連の調査にも重点がおかれ、1960年代の成果にたつて、1970年代にもあらためて大規模な調査が

実施され、高句麗関係遺跡の情報は格段に増加した（大城山城、安鶴宮址ほか）。

ここで、1980年代以降の動向のうち、平壤地域にかかわる北朝鮮以外もふくめた学術交流の一端を、展示、出版、共同調査にみたい。

展示では、1985年に『高句麗文化展』（高句麗文化展実行委員会）が日本各地を巡回した。安岳3号墳墓室の実大模型、多数の壁画古墳などの展示が目をつけたが、平壤の大城山城、安鶴宮遺跡、定陵寺などの都城、寺院関係の遺跡、遺物の展示も初公開のものが多数含まれ、貴重な機会であった。

1990年代では『高句麗の歴史と遺跡』（東・田中 1995）が、北朝鮮、中国に所在する高句麗遺跡について現地踏査をふまえた詳細な概説書として刊行された。これまで類書はなく、高句麗考古学において画期的な出版物といえよう。

また、韓国での1990年代における顕著な動向として、『高句麗研究』（高句麗研究会 1995～のち『高句麗渤海研究』と改称）の創刊をあげよう。同誌には多くの高句麗関係の論考が掲載されるようになり、平壤地域を含む2000年までの北朝鮮における高句麗遺跡関係の調査研究史の詳細な整理もなされている（金 希燦 2001）。

2000年代には、高句麗関係の博物館展示が盛んになる。なかでも2005年の高麗大学校における展示『韓国の Global Pride 高句麗』は、平壤地域をはじめとする北朝鮮の発掘調査による多数の高句麗遺物の出陳が実現した（高麗大学校博物館 2005）。

また、2000年代には高句麗遺跡に対する南北共同調査が実現した。調査は、2005年および翌2006年におこなわれ、南側は、高句麗研究財團（のち東北亜歴史財團）を中心として諸大学の研究者、北側は、金日成総合大学、文化保存指導局、社会科学院考古学研究所、中央歴史博物館の研究者が参加している。調査は、大城山城、安鶴宮遺跡やその付近の高句麗古墳、定陵寺とその周辺の古墳群などに及んだ。とくに、安鶴宮遺跡では、小規模ながら発掘調査も実施された。この共同調査のうち、発掘調査を伴った調査については次の2冊の報告書が刊行された。

東明王陵、真坡里9号墳、平壤城、大城山城など

『南北共同遺跡調査報告書 平壤一帯の高句麗遺蹟』高句麗研究財團 2005

安鶴宮址 『南北共同遺蹟調査報告書第2冊 高句麗安鶴宮調査報告書2006』

東北亜歴史財團 2006

最近の動向では、壁画古墳である高山里1号墳の再調査に日本側が協力したことをあげておく（早乙女 2012）。

2 集安・桓仁における遺跡調査

1) 大戦前の遺跡調査

中国吉林省集安の地は、中期(3世紀初～西暦427年)の都城の地である。そのため、その時期の都城関係の遺跡、古墳など高句麗時代の遺跡が数多く残っている。そのなかでも通溝平野にたつ巨大な広開土王碑や華麗な壁画が描かれた高句麗古墳がよく知られている。

また、遼寧省桓仁は集安に先立つ前期(紀元前1世紀頃～3世紀初)の都城の所在地であり、大戦前にもわずかながら踏査が行われている。

集安・桓仁をふくむ中国東北地区は清朝発祥の聖地として、封禁政策がとられ、人々の入植が禁じられており、荒廃にまかされていたが、19世紀以来、封禁政策がゆるみ、中国人の入植が盛んになっていく。

集安での遺跡調査の嚆矢は、1905年の鳥居龍蔵による調査で、広開土王碑、通溝城、古墳などを調査している(鳥居 1910)。鳥居は1912年にも集安を訪れて調査(朝鮮総督府の古蹟調査事業の一環としての調査)をおこなっているが報告は未刊のままとなった。一方、1907年にはフランスのシャパンヌによる調査もある。

1913年にはじまる関野 貞一行の調査は1917年にも行なわれた(朝鮮総督府 1915、1917、1920)。

1918年には黒板勝美によって広開土王碑を中心とした調査がおこなわれているが、このときの調査成果は未刊のままに終わっている。

これらの集安における遺跡調査は、現地に調査組織はなく、治安が悪いため、鴨緑江の対岸の満浦鎮から日帰りでの調査が継続されたという。

集安での遺跡調査については、満洲国の成立(1931年)後、日滿文化協會と文教部の計画により当初関野を代表とする調査団を結成し調査に備えたが関野の死(1935年)により、あらためて1935年と1936年に、池内宏・濱田耕作ひきいる調査グループによる調査が行なわれ、報告書として次のような巨冊が刊行された。

山城子山城 通溝城 廣開土王碑 將軍塚 太王陵 千秋塚 五塊墳 牟頭婁塚
東抬子遺跡 『通溝 上』(池内) 1938

舞踊塚 角抵塚 三室塚 四神塚 牟頭婁塚 環文塚 『通溝 下』(池内・梅原) 1940

一方、桓仁に関しては、集安に比して、小規模な踏査がおこなわれたにとどまった。

踏査をおこなった研究者には、黒田源次(踏査：1936年)、三上次男(踏査：1944年)などが記録を残している。高句麗遺跡に関しては以下のような遺跡を訪れている。

五女山城 (黒田)1937 (三上)1946
將軍塚 (黒田)1937 (三上)1946

2) 第二次大戦後の遺跡調査

集安の地は、1945年の日本敗戦後は、中国の領域となり、高句麗遺跡の調査は、中国社会科学院考古研究所や、吉林省文物考古研究所、吉林省博物館、集安県博物館(のち集安市博物館)、などの手によっておこなわれている(西川1985、1992、耿鐵華2003、2013、耿鐵華・李樂營2012)。

この間、1960年代には北朝鮮による高句麗、渤海遺跡踏査がおこなわれ、その報告が刊行されている(朱榮憲1966)。踏査した桓仁、集安での高句麗関係の主な遺跡は次の通りである。

桓仁五女山城、高麗墓子村古墳群、集安東台子遺跡、駅前遺跡、城后遺跡、將軍塚、太王陵、広開土王碑、舞踊塚

朱榮憲『中国東北地方の高句麗及び渤海遺蹟踏査報告』社会科学院出版社 1966

また、1980代の成果をもとに、集安、桓仁地域での大戦後の遺跡調査成果を網羅し、概括したつぎのような刊行物は、以後の調査研究への基礎となった。

吉林省考古研究室・集安縣博物館「集安高句麗考古的新收穫」『文物』1984年1期 1984

『集安縣文物志』(吉林省文物志編委會) 1984

『桓仁滿族自治縣文物志』(桓仁滿族自治縣文物志編纂委員會) 1990

『吉林省志 卷四十三 文物志』(吉林省地方志編纂委員會) 1991

ここで、学术交流の観点から集安・桓仁地域をめぐる、中国と諸外国との調査研究の状況を見学、出版の面からみておく。

集安の地にたいする外国人の見学は1980年代から可能になった。日本人の見学は、東北大学学者訪朝・訪中団による訪問が早いものであろう(東北大学学者訪朝・訪中団1981)。このあと、読売新聞社主催の訪問などがつづく(読売テレビ放送1988)。韓国人の訪問も1992年前後から盛んになり、訪問記録の刊行されているものに限ると、申 澄植(申1996)、李 亨求他(申1996、李 亨求他1996)などがある

出版の面では、中国の李 殿福による『高句麗・渤海の考古と歴史』(西川 宏訳、1991)が日本で、李 殿福『中国内の高句麗遺跡』(車 勇杰訳 1994)が韓国で刊行された。これらは、中国人による高句麗考古学の初期の概説であり、また集安を主とする中国内の高句麗遺跡を網羅的に紹介したものである。

これらのほか、集安・桓仁地域の現地に即した高句麗に関する展示あるいは出版物の主なものをあげておく。

『空から見た高句麗と渤海』展(写真展、ソウル大學校 2008) 2008

さて、2000年代になって、中国側の調査で注目されるのは、ユネスコによる世界遺産登

録に関連する調査である。桓仁での五女山城、集安では山城子山城、通溝城のほか、高句麗王陵に推定されている太王陵などの主要な大型積石塚に及ぶ高句麗時代の最重要遺跡に対する組織的な調査であって、次のような報告書が刊行され、高句麗遺跡に関する情報は格段に増加した。

五女山城 下古城子土城『五女山城』（遼寧省文物考古研究所） 2004

山城子山城『丸都山城』（吉林省文物考古研究所・集安市博物館） 2004

通溝城 民主遺跡『國內城』（吉林省文物考古研究所・集安市博物館） 2004

太王陵 千秋塚 將軍塚ほか『集安高句麗王陵』（吉林省文物考古研究所・集安市博物館） 2004

3 韓国域における高句麗遺跡の調査研究

韓国域において高句麗遺跡の調査の進展は1990年以降のことである。その大きな契機となったのは、ソウル九宜洞遺跡の調査成果の見直しであろう。1970年代に発掘されたこの遺跡が当初考えられた百濟遺跡ではなく、高句麗の堡壘であることが判明し、そのご、漢江北岸をはじめ臨津江流域などに高句麗の堡壘遺跡が多数存在することが確認され、発掘調査が進展している（九宜洞報告書刊行委員会 1997、ソウル大 学校博物館 2000）。このような韓国域の高句麗遺跡の認識には、1980年代に百濟前期都城遺跡として調査されていたソウル夢村土城における高句麗土器の存在の認識も大きく寄与した（崔鍾澤 2002、2006）。韓国域の高句麗遺跡には、堡壘遺跡のほか山城（沈光注 2010、梁時恩 2010）、古墳（梁時恩 2010、崔鍾澤 2011）が知られている。堡壘、山城関係の報告書の一部を掲げる。

九宜洞堡壘『漢江流域の高句麗要塞』九宜洞報告書刊行委員会 1997

峨嵋山堡壘『峨嵋山第4堡壘—発掘調査総合報告書—』ソウル大 学校博物館・ソウル

大 学校人文 学 研究所・九里市・九里文化院 2000

南城谷山城『清原 南城谷 高句麗遺蹟』忠北大 学校博物館 2004

瓠蘆堡壘『漣川瓠蘆古壘(第2次発掘調査報告書)』

韓國土地公社土地博物館・漣川郡 2007

このような韓国域の高句麗遺跡の調査研究成果を大幅にもりこんだ展示も盛んに催されるようになった。展示図録の一部をあげる。

釜山市・ソウル大 学校博物館『特別展 高句麗 漢江流域の高句麗要塞』

ソウル大 学校博物館 2000

高麗大 学校博物館『韓國の Global Pride 高句麗』 2005

京畿道博物館『我々のなかの高句麗』京畿道博物館 2005

福泉博物館・ソウル大 学校博物館『高句麗 韓半島を抱く』 2012

第2節 高句麗文化の位置づけ—第二次大戦前と第二次大戦後—

本節では、遺跡調査の成果にもとづく高句麗文化の位置づけをめぐって①日本人による遺跡調査をどのように総括したか②調査の主体が日本人から朝鮮人・中国人の手に移った大戦後の遺跡調査では何が目的とされているかを比較検討する。

1 日本人による大戦前の遺跡調査の総括

第二次大戦前における高句麗遺跡の調査の成果はどのように総括されたのであろうか。その一例として、1918年以降、朝鮮や満洲の遺跡調査に関わった梅原末治の記述をみよう。

梅原は、平壤、慶州、集安などの総督府、満洲国時代の遺跡の調査の意義について触れた文章において、次のように述べた。

「(略)朝鮮半島に於ける古蹟調査事業のみは、それに聯關した歴史博物館の經營と相俟つて、勢力圏内における恒久性を持った文化面の一つの事業と言ひ得るものであつて、それは單に半島古代文物の状態を闡明する上に役立つばかりでなく、廣く東亞古代文化の研究に寄與する効果をも擧げた點で、世界の東洋學界の注目を聚めたものであつた。彼の平壤を中心とする漢樂浪郡時代の遺跡の調査が、從來ほとんど未開拓のまゝに残された支那大陸の考古學的研究の一つの基準を與へた如き、或は、同地附近や北邊外の通溝地方に於ける高句麗時代の壁畫古墳の検出が、南鮮慶州に於ける新羅盛時の優れた彫刻建築遺構の検出と相俟つて、東亞の古美術研究に新しい資料を提供し、その六朝から唐代への間の知見を著しく擴充した事などは今や學界の常識として、それが日本考古學の名聲を高からしめるに大きな役割を果たしたものであり、(略)」(梅原 1946)

つまり、大戦前の遺跡調査の意義が、高句麗文化そのものの解明にあるのではなく、当時、中国大陆での調査が思うようにならなかった状況のなかで「六朝から唐代への間の知見を著しく擴充した」という点にあったことが強調されている。

報告のなされなかった調査遺跡の一部は、大戦後に出版された『朝鮮古文化綜鑑』のうち第4巻 高句麗篇に盛り込まれた(梅原・藤田 1966)。

この書物の刊行は、『朝鮮古蹟圖譜』の続編という意図もあり、平壤地域では、清岩里廃寺ほかの寺址など、すでに古蹟調査報告で報告された成果も含めて収録している。本書で初めて報告された高句麗関係の遺跡は、平壤地域の古墳では、内里古墳群のうちの1号墳、真坡里古墳群のうち1号墳、4号墳の壁画古墳などである。遺物についても、石製品、飾り金具類、装身具類、土器類、など古墳副葬品、そして、寺院跡出土品として仏像や、瓦類が収録された。集安地域の古墳では、「輯安西盃古墳群」として、五盃墳、同第17号墳、同四神塚、同12号墳などの壁画古墳が収録された。桓仁の五女山城も初めて収録された。

未報告の調査に関しては、これらからずっと後になるが、かつて調査(1939年)した平壤・上五里廃寺の成果について調査担当者斎藤忠により遺跡の図面が公表されている(斎藤 1971)ことをあけておく。

このように、戦前の日本人による遺跡調査の報告は以上によっても全く不十分のままに終わったことは、敗戦まで長く朝鮮の地にあつて、遺跡の調査全般に関わってきた藤田亮策の記述によっても知ることができる。藤田によれば、上にあげた遺跡以外にも未報告におわった遺跡は数多い(藤田 1948)。

2 大戦後の調査研究—北朝鮮・中国・韓国—

(1) 北朝鮮の調査研究

多くの高句麗遺跡の所在する北朝鮮の考古学研究において、高句麗にかんする考古学は大きな位置を占める。高句麗考古学の成果として第一にあげるべきは『高句麗文化』(1975)の刊行であろう。同書は、大戦後に出版した北朝鮮による豊富な調査研究の成果を活用して、多方面にわたる高句麗文化をまとめたものである。日本、中国、韓国をふくめて、考古学の成果を主に構成した高句麗文化に関する最初のまとまった書物としても画期的なものといえよう。

本書にみられる高句麗考古学の成果は、1950年代後半から1960年代にかけて集中的におこなわれた植民地期の成果の見直しと再構成をもとにしている。とくに平壤地域における高句麗遺跡の一連の見直しは、雑誌『文化遺産』(のち『考古民俗』と改称)に散見する。

この見直しは、解放後の発見、調査による安岳三号墳などの新資料をくわえて、高句麗文化の全般にわたっている。本書は、それらの成果をふまえた記述となっている。

このあと、程なくして刊行された『朝鮮考古學概要』(1977年)は、北朝鮮における最初の考古学概説書で、独自の時代区分、時期区分によっており、高句麗考古学の成果を盛り込んではいくが、高句麗に関しては「三国の文化」にごく短く触れるほかは、項目毎に分散した記述となっており、高句麗考古学、高句麗文化として、まとまった記述にはなっていない。

高句麗考古学に関する研究書としては、『朝鮮考古學全書 中世編 高句麗』(バク ジンウク 1991)が刊行された。近年には『朝鮮考古學全書』(社会科学院考古學研究所 2009)の叢書が出版された。基礎資料の集成を徹底している点に大きな特色があり、高句麗都城に関係する巻として『高句麗の城郭』(中世編4)、『高句麗の建築』(中世編5)がある。これらの研究書をみると、先述したような1950年代後半から1960年代にかけて集中的におこなわれた調査研究の成果が踏襲されていることがわかる。

この時期の特色は、植民地期の調査研究の全面的な見直しによって、文献史も含めて高句麗史像の再構成をめざしている。通史の一部として刊行された『朝鮮全史 3 中世編 高句麗史』(1979年)はその代表例で、同書の「文化」の章は、大部分が先の『高句麗文化』にまとめられた考古学的研究の成果による記述となっている。

これと関連して、北朝鮮における高句麗史、高句麗文化のとらえかたをみておく。先の『高句麗文化』には、「過去、我が国の歴史においてわが民族が最も強かった時期は高句麗時代でした」という金日成の教示がかかげられている。高句麗文化にたいする同様の教示は、ほかの刊行物においても共通してみられる。

要するに、高句麗の歴史を自国史、自民族の歴史としてとらえるという立場が表明されている。

(2) 中国の調査研究

一方、中国側では高句麗史、高句麗文化のとらえかたに大きな違いが見られる。この一例を、近年、ユネスコの世界遺産登録に関連しておこなわれた組織的な発掘調査の成果を刊行した発掘調査報告書『丸都山城』(吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004)から紹介してみよう。

同書には、「高句麗は東北アジアの歴史発展の進行過程に重要な栄光をあたえた東北の少数民族政権の一つである。漢元帝建昭二年紀元37年、朱蒙が西漢玄菟郡の管轄する地に立てた地方政権で、高句麗という。高句麗は地方政権であり、民族の称号はここに始まる。(略)」、「西漢元始三年(紀元3年)、国内城(現在の集安市街)に遷都し、同時に尉那巖城(後に丸都と称する)を築いた。北魏始光4年(紀元427年)都を平壤(現在の朝鮮民主主義人民共和国の首都)に移す。唐高宗総章元年(668年)、高句麗政権は唐朝によって滅亡するまで705年のあい

だ存続した」

この記述にみられるように中国では、高句麗の歴史を、多民族国家の一員としての少数民族の歴史ととらえる。これ以前に刊行された概説書、概説的記述でも同様の論調はあるが、近年の「東北工程」をめぐる議論では、特に、こうした見方が強調されている。

高句麗史、高句麗文化の評価には、このように朝鮮民族史の一つと見る北朝鮮と、あくまで中国の一地方政権とする、二つの立場が表明されている。

次にのべる韓国も基本的に北朝鮮と同様の立場にたつとみてよい。

(3) 韓国の調査研究

韓国では、解放後しばらくは高句麗考古学の研究は低調であった。最大の理由は、韓国域には、北朝鮮域と比較して高句麗遺跡の存在が希薄であったことによると思われる。1946年、慶州壺杆塚における高句麗製銅盒の出土（国立博物館1948）、1979年、忠清北道清州での高句麗碑（中原高句麗碑）の発見（檀國大學校 1979）などをわずかな例外として、直接、高句麗の遺跡、遺物に接する機会が極端に少なかったことが挙げられよう。韓国での最初の考古学概説書は『韓國考古學概論』（金 元龍1966）であるが、そこでは、高句麗に関する記述は古墳文化のみが扱われたに過ぎなかった（註3）。

韓国ではその後考古学概説書はしばらく刊行されなかった（註4）。いま韓国における最新の考古学概説書は、『韓國考古學概論』刊行から数えて実に40年後の『韓國考古學講義』（初版2007、改訂新版2010）である。同書における高句麗関係の記述をみることにする（改訂新版による）。

本書での三国時代（加耶を含める）の考古学のなかで、高句麗の占める位置を頁数で見ると、百済、新羅、加耶、とほぼ同量にあつかわれている。高句麗考古学の内容を、項目によって紹介すると次のようである。遺跡としては、古墳、城、都城体系、建物址、寺院址、遺物では、仏像、装身具、生産道具・工具、武器、甲冑・馬具、土器、青銅容器、カマド、瓦磚、など多数の項目から構成されている。

これを百済、新羅、加耶関係の記述と比較した場合、高句麗で欠けているか、非常に乏しいのは、生産遺跡（土器窯、製鉄、工房など）、祭祀遺跡、集落・住居跡などであり、高句麗で豊富な資料のあるのが壁画古墳関係である。

韓国の概説書で高句麗関係の記述が増加した理由には、先述したように1990年代になってソウルをはじめとする京畿道一帯における多数の高句麗時代の堡壘遺跡の発見が大きな契機になったと思われる。近年の顕著な動向としてあげるべきは、かつては情報が極端に限られていた解放後の北朝鮮、中国における調査研究の成果を大幅にとりいれた研究が著しく進展していることであろう。

以上を概括すると、高句麗文化のとらえ方に現在の国家を単位として大きな相違がみられることがわかる。しかしながら、高句麗史は現在の国家の枠をこえて展開しているのであり、高句麗史の帰属を中国、朝鮮のいずれとみるかと

いった二者択一をもとめる発想には最初から無理があることはすでに文献史学からの指摘があるとおりである（井上 2005a・b、2013）。遺跡、遺物により高句麗文化をあつかう考古学側としては、こうした議論の根底に型式学的方法や層位学的方法など考古学の基本的な研究方法に基づく認識の共有が求められるが、これまでの諸説をみると必ずしも、それが徹底されていないことにも議論が大きく分かれる要因があると考えられる。

本研究において、瓦の型式編年の徹底などに力点をおき確実な基礎にたった議論の展開をめざすのは、このような認識による。

註

- 1 文献史の研究者側では、朝鮮史や満洲史にかかわる歴史研究について学史的な検討が進行している。古くは、旗田 魏が研究の先鞭をつけ、近年では、寺内威太郎、井上直樹、桜沢亜伊などの著述がある（旗田 1976、寺内 2004、井上 2005a・b、2013、桜沢 2007）。

第二次大戦前の遺跡調査の学史的な研究は関野 貞の調査研究をテーマにした『関野東アジア踏査』（東京大学総合研究資料館 2005年）所載論文に多くの言及がある。李 弘植は、高句麗遺跡に関する大戦前前の日本人を中心にした調査と大戦後の動向もくわえて1966年までの調査研究史を自身の体験を含めて詳細にたどっている（李弘植1966）。また西谷 正は、大戦前の高句麗遺跡の調査史を詳細に叙述する（西谷 2001）。平壤や、集安での遺跡調査に従事した当事者の回顧として、梅原末治、藤田亮策、小泉頭夫、有光教一による記述があり、当時の状況を伝える（梅原1946、1969、1973、藤田 1948、1951、1953、小泉1986、京都木曜クラブ2003、有光 2007）。

このほか、長く満洲の地にあった三宅俊成は「満洲考古學史」を「踏査時代」（1895～1937年）と「本格的調査発掘時代」（1937～1943年）に分け、年次ごとに詳細な調査研究をあげた（三宅 1944）。のち、三宅は、大戦後を含めた満洲地域の調査史では、大戦前を第1期（関東州および南満洲鉄道沿線の遺跡発掘調査時代＜1905～1993年＞）、第2期（東北4省全土に考古学的発掘調査が行われた時代＜1931～1945年＞）に分けて整理する。第1期は、前期（鳥居龍蔵の独占的調査期＜1905～1926年＞）と後期（東亜考古学会中心の発掘調査網＜1926～1931年＞）に細分している（三宅 1975）。

第二次大戦後の集安を含めた高句麗遺跡の調査研究動向は、西川 宏（西川1985、1991）や李 殿福（1992）などがまとめ、近年まで含めた中国における調査研究動向は、耿鐵華が網羅的にあつかう（耿2012）。高句麗壁画古墳をふくむ高句麗遺跡全般にわたる調査研究史については、東 潮（1997、2010）も参照。

- 3 金 元龍『韓国考古學概論』は、その後、第三版（書名は第二版以後『韓国考古學概説』）まで刊行されるが、高句麗文化に関する記述の扱いは変わらない。
- 4 韓国考古学の成果を日本人向けに概説した書物に金 廷鶴編『韓国の考古学』（1972）と、金 元龍編『韓国の考古学』（1989）の二書がある。

参考文献

<日本語>

- 關野 貞 1904 『韓國建築調査報告』(東京帝國大學工科大学學術報告 6 號)
東京帝國大學工科大学 鳥居龍蔵 1906「滿洲調査復命書」史學雜誌 17
編 2・3・4 号號、のち 1976『鳥居龍蔵全集』8 卷、岩波書店に収録。
- 鳥居龍蔵 1910 『南滿洲調査報告』
- 三宅俊成 1944 『滿洲考古學概説』滿洲事情案内所
- 梅原末治 1946 「古蹟調査事業の経過」『朝鮮古代の文化』高桐書院
- 藤田亮策 1948 「高句麗の思出」『史学』23 卷 2 号 (のち藤田先生記念事業会 1963『朝鮮学論考』に収録)
- 藤田亮策 1951 「朝鮮古文化財の保存」『朝鮮学報』創刊号 朝鮮学会
- 藤田亮策 1953 「朝鮮古蹟調査」黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』吉川弘文館
- 梅原末治 1969 「日韓併合の期間に行なわれた半島の古蹟調査と保存事業にたずさわった一考古学徒の回想録」『朝鮮学報』51 輯 朝鮮学会
- 金 元龍 (西谷 正訳)
1972 『韓国考古学概論』東出版
- 金 廷鶴編 1972 『韓国の考古学』河出書房新社
- 梅原末治 1973 『考古学六十年』平凡社
- 三宅俊成 1975 『東北アジア考古学の研究』国書刊行会
- 旗田 魏 1976 「日本における朝鮮史研究について」『近代日本における歴史学の発達下』
青木書店
- 斎藤 忠 1976 「飛鳥時代寺院の源流としての高句麗寺院の一型式」『日本古代遺跡の
研究 論考編』吉川弘文館
- 金 元龍 (西谷 正訳)
1984 『韓国考古学概説 増補改訂』六興出版
- 西川 宏 1985 「集安における高句麗遺跡調査の成果」『考古学研究』31 卷 4 号 考古学
研究会
- 小泉頭夫 1986 「高句麗の遺跡を掘る」「平壤博物館の最後」『朝鮮古代遺跡の遍歴一発
掘調査三十年の回想一』六興出版
- 東北大学学者訪朝・訪中団
1981 『高句麗の故地をたずねて』東出版寧楽社
- 読売テレビ放送
1988 『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社
- 金 元龍編 1989 『韓国の考古学』講談社
- 李 殿福 (西川 宏訳)
1991 「高句麗の考古学」『高句麗・渤海の考古と歴史』学生社
- 西川 宏 1992 「中国における高句麗考古学の成果と課題」『青丘学術論集』2 集 韓国
文化研究振興財団
- 東 潮 1997 「高句麗遺跡の調査研究史抄」「高句麗遺跡の調査」『高句麗考古学研
究』吉川弘文館
- 西谷 正 2001 「1945 年以前における高句麗遺跡の発掘と遺物」『高句麗研究』12 輯 高
句麗研究會
- 京都木曜クラブ
2003 「有光教一氏インタビュー 私と朝鮮古蹟調査研究一戦前から戦後を通

- して一」『考古学史研究』10号
- 寺内威太郎 2004 「『満鮮史』研究と稲葉岩吉」『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの—』(寺内威太郎・永田雄三・矢島國雄・李 成市)刀水書房
- 早乙女雅博 2005 「関野貞と朝鮮考古学」『関野貞 東アジア踏査』東京大学総合研究資料館
- 井上直樹 2005a 「高句麗史研究と「国史」(上)」『東アジアの古代文化』122号 大和書房
- 井上直樹 2005b 「高句麗史研究と「国史」(下)」『東アジアの古代文化』123号 大和書房
- 桜沢亜伊 2007 「満鮮史観」の再検討—「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心として—『現代社会文化研究』39号 新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 有光教一 2007 『朝鮮考古学七十五年』昭和堂
- 東 潮 2010 「高句麗の考古学史」『考古学ジャーナル』596号 ニューサイエンス社
- 早乙女雅博 2012 「高句麗壁画古墳の学術調査」『世界遺産高句麗壁画古墳報道写真展—古代へのいざない』共同通信社
- 井上直樹 2013 『帝国日本と“満鮮史”—大陸政策と朝鮮・満州認識—』塙書房
 <朝鮮語 韓国語>
- 金 載元・金 元龍
 1948 『壺杆塚と銀鈴塚』国立博物館
- 朱 榮憲 1966 『中國東北地方の高句麗及び渤海遺蹟踏査報告』社會科學院出版社
- 李 弘植 1966 「高句麗遺蹟調査の歷程」『白山學報』1號
- 金 元龍 1966 『韓國考古學概論』(私家版)
 社會科學院歴史研究所
 1979 『朝鮮全史 3 中世編 高句麗史』科學、百科事典出版社
- 檀國大學校 1979 「中原高句麗碑特輯號」『史學志』13輯 檀國大學校史學會
- 金 元龍 1986 『韓國考古學概説』(第三版) 一志社
 社會科學院考古學研究所
 1991 『朝鮮考古學全書 中世編 高句麗』科學、百科事典綜合出版社
- 申 澄植 1996 『集安高句麗遺蹟の調査研究』(韓国史研究支援報告資料集1) 國史編纂委員會
- 李 亨求・趙 由典・尹 世英・車 勇杰
 1996 『高句麗の考古文物』(調査研究報告書 96-1) 韓国精神文化研究院
 九宜洞報告書刊行委員會
 1997 『漢江流域の高句麗要塞—九宜洞遺蹟發掘調査綜合報告書』
 ソウル大學校博物館
- 任 孝宰・崔 鍾澤・ヤン ソンヒョク・ユン サントク・チャン ウンチャンウン
 2000 『峨嵯山第4堡壘—發掘調査綜合報告書—』ソウル大學校博物館・ソウル
 大學校人文學研究所・九里市・九里文化院
 ソウル大學校博物館
 2000 『特別展 高句麗 漢江流域の高句麗要塞』
- 崔 鍾澤 2002 「夢村土城内高句麗遺蹟再考」『韓國史學報』12號 高麗史學會
 京畿道博物館
 2005 『我々のなかの高句麗』
 高麗大學校博物館

- 2005 『韓國の Global Pride 高句麗』
- 崔 鍾澤 2006 「南韓地域高句麗土器の性格」 『先史と古代』 韓國古代學會
- 姜 賢淑 2007 「高句麗」 『韓國考古學講義』 韓國考古學會
ソウル大學校博物館
- 2008 『空から見た高句麗と渤海』
- 梁 時恩 2009 「日本の高句麗・渤海遺蹟調査に對する検討—1945年以前まで—」 『日帝
時期滿洲史朝鮮史認識』 東北亜歴史財團
- 社會科學院考古學研究所
- 2009 『高句麗の城郭』 (朝鮮考古學全書 中世編4) (株)ジンインジン
- 社會科學院考古學研究所
- 2009 『高句麗の建築』 (朝鮮考古學全書 中世編5) (株)ジンインジン
- 韓國考古學會
- 2010 「高句麗」 『改訂新版 韓國考古學講義』
- 梁 時恩 2010 「南韓内高句麗城郭の構造と性格」 『高句麗渤海研究』 35輯
- 沈 光注 2010 「南韓地域の高句麗城郭と高句麗防禦體系」 『韓國城郭研究の新しい觀點』
韓國城郭學會
- 崔 鍾澤 2011 「南韓地域高句麗古墳の構造特徴と歴史的意味」 『韓國考古學報』 81輯
釜山市福泉博物館・ソウル大學校博物館
- 2012 『高句麗 韓半島を抱く』
- < 中国語 >
- 吉林省文物志編纂委會
- 1984 『集安縣文物志』
- 桓仁滿族自治縣文物志編纂委員會
- 1990 『桓仁滿族自治縣文物志』
- 吉林省地方志編纂委員會
- 1991 『吉林省志 卷四十三 文物志』
- 李 殿福 1992 「高句麗考古的回顧與展望」 『遼海文物學刊』 1992年2期 (のち李 1994 『東
北考古研究(二)』 中洲古籍出版社に収録)
- 魏 存成 1994 『高句麗考古』 吉林大學出版社
- 魏 存成 2002 『高句麗遺迹』 文物出版社
吉林省文物考古研究所・集安市博物館
- 2004 『丸都山城—2001～2003年集安丸都山城調査試掘報告』 文物出版社
- 耿 鐵華 2003 「高句麗考古調査發掘與研究」 『古代中國高句麗歷史統論』 中國社會科學
院出版社 (のち耿 2004 『高句麗考古研究』 吉林文史出版社に収録)
- 耿 鐵華・李 樂營主編
- 2012 『高句麗研究史』 吉林大學出版社

第2章 高句麗都城研究の現状と論争点

本章では、高句麗都城研究の現状を、研究略史をたどりつつ、高句麗都城の全体像、高句麗都城の変遷観にかんする代表的な研究をとりあげ、現在の高句麗都城研究の論争点は何であるかを明確にしたい。

第1節 高句麗都城研究略史と高句麗都城の全体像

高句麗都城にかんして、前章でも述べたように、文献史学では、すでに19世紀始め頃から、史料にみえる卒本、丸都城、平壤城などの都城にかんする考証と遺跡の位置比定などの研究が盛んにおこなわれた。白鳥庫吉、鳥居龍蔵などの研究が代表的である。多くは、発掘をとまわず、現地踏査によって研究するいわば歴史地理学的な研究であったと概括できよう。

一方、踏査をもとにしつつも、より遺跡の実態に即した考古学的な研究は、関野貞によって開拓されたが、第二次大戦前には、本格的な発掘調査までは及ばなかった。

関野以外に、遺跡にもとづいて高句麗都城の全体像を示した記述はほとんどない。

関野の高句麗都城にたいするまとまった見解は、『朝鮮美術史』(1932)の「高句麗」に要を得た記述がある。都城個別の論文としては、中期都城をあつかった「丸都城考」(1920)及び後期都城を対象にした「高句麗の平壤及長安城に就いて」(1928)が最も代表的な、かつ重要である。

このほかの論文には1914年、「滿洲輯安縣及平壤附近に於ける高句麗時代の遺蹟」『考古學雑誌』5巻3号(1914)などがあり、関野の見解の変遷をたどることができる。

また、これの基礎になった高句麗瓦の年代観については、「朝鮮の瓦文様」(1922・1923)ほかの論文がある。

第二次大戦後は、都城遺跡の発掘が進展する。

高句麗都城のうち、前・中期に属する桓仁、集安地域での発掘調査は、第二次大戦後、新中国になって進行し、また、後期都城に属する平壤地域での発掘調査は北朝鮮によって進められている。

こうした発掘調査の進展により多くの新知見が得られ、研究は進んだといえる。しかし、個々の遺跡の実態をふまえた高句麗都城全体像の把握にかんしては、発掘調査が進展した現在でも、種々の説が並び立っているのが現状である。

個別の遺跡にかんする調査研究史は、次章以下でふれることにして、高句麗都城の全体像を変遷観からみることにする。

第2節 高句麗都城の変遷観

高句麗都城の変遷観は、時期区分に端的にあらわれる。代表的な時期区分を取り上げる。

(1) 田中俊明説

3期区分をとり、以下のようである(田中1995、2009)。

		山城	平地城
前期(卒本時代	紀元前1世紀ごろ～3世紀初め)	五女山城	蝸蛤城
中期(国内時代	3世紀初め～427年)	山城子山城	通溝城
後期(平城時代	427～668年)	2期に細分	
	前期平壤城(427～586年)	大城山城	清岩里土城
	後期平壤城(586～668年)		平壤城(長安城)

(2) 魏 存成(中国)の説

3期区分であり、次のようである(魏 1994、2002)。

田中説との大きな違いは、中期の開始年代についてであって、魏は、三国史記によってAD. 3年からとする。

	山城	平地城
初期(B. C. 37年～A. D. 3年)	五女山城：下古城子土城	
中期(A. D. 3年～427年)	山城子山城(丸都城)	国内城・平壤城
後期A. D. 3年～668年)	大城山城	安鶴宮または清岩里土城 平壤市区内古城

このほか、王綿厚(中国)は、大別は魏と共通しているが、遺跡の比定については、魏と異なり、後期都城について「三城一宮」という独自の説を掲げる(王 2002)。

(3) 閔 徳植(韓国)の説

4期区分であり、次のようである(閔 2005、註3)。

初期都城(B. C. 37年～A. D. 3年)	: 下古城子土城、五女山城、
前期都城(3～427年)	: 国内城、丸都山城
中期都城(427～586年、前期平壤城都邑期)	: 安鶴宮城・大城山城
後期都城(586～668年、後期平壤城都邑期)	: 平壤城北城、内城、中城、外城

(4) 北朝鮮の見解

北朝鮮の刊行物には、高句麗都城の時期区分を明確に示した記述はみあたらないが通史、図録の記述を総合すると、次のように整理できる。

初期の都	: 桓仁 五女山城
二番目の都	: 集安 国内城 尉那岩城 (A. D. 3～427)
集安から移った都	: 平壤(427～668年)
	安鶴宮(427～586年)
	平壤城(586～668年)
	大城山城

第3節 高句麗都城の論争点

高句麗都城研究で現在論争になっている点を、都城変遷の時期ごとにとりあげる。

まず、前期都城では、山城として五女山城をあげることは諸説一致している。平地城については、下古城子土城をあげる説が多いが、田中は、蝸蛤城を有力とみている。したがって、前期の重要な論点のひとつは平地城の特定ということになる。また、前期都城の逃げ城とされる五女山城では中腹に存在する石築城壁の築造年代についても諸説ある。石築城壁をめぐる中期、後期の都城においても問題になっており、重要な論点になる。

中期都城では、山城子山城と通溝城をあげる点で研究者の見解はほぼ一致している。平地城の通溝城では、石築城壁以前に、土築城壁の存在が指摘された。城壁の変遷と、城内の、王宮をはじめとする諸施設のあり方、などの問題にもかかわる。また平地城とセットをなすと考えられている山城子山城については、現存の石築城壁の初築年代、城門や、城内の諸遺構の年代的な位置づけ、などの論点がある。

後期都城では、前期平壤城の王宮を清岩里土城とみるか安鶴宮遺跡と見るか論争となっており、概説書あるいは、概説的記述では両論併記となっているものもある。とくに安鶴宮遺跡の瓦の年代観は議論の根幹にかかわる重要な論点である。

高句麗都城にかかわる議論では、上にも見たように、遺跡の評価にも密接に関わる瓦の年代観や、城壁の年代観などに見解の隔たりが大きい。

例えば、安鶴宮遺跡を高句麗前期平壤城の王宮とする説では、高句麗の平地の王宮は、通溝城→安鶴宮遺跡→渤海の宮殿に継承される、という図式で説明される(梁 正錫 2012)。遺跡の歴史的評価は、こうした基礎的な認識そのものに対する検討なしには進展しない状況がある。

以上のように、高句麗の都城では、山城が欠かせない構成要素となっていることには研究者の認識は一致している。しかし、平地城の比定問題に限らず、平地城、山城の実態をどうみるか、など遺跡自体の基本的な認識が共有されておらず、研究者によって都城の全体像は大きく異なる。新たな資料の出現に期待されるのは勿論であるが、既知の遺跡、遺物に対しても年代観の違いが、共通の認識をさまたげている。考古学の基本的な方法による年代観の共有が議論を進展させる基礎になるとと思われる。本研究で、研究の基礎となる瓦などの編年研究に力を注いでいるのは、そうした認識にもとづく。

註

- 1 田中俊明のこのような見解は、総合的に論じたものでは、「朝鮮三国の都城制と東アジア」(田中 1991)が早い。
- 2 魏 存成は、その後『高句麗遺迹』(2002年)を著す。この書は、構成、内容とも『高句麗考古』の改訂版とみられよう。魏は、1985年に「高句麗初、中期都城」(魏 1985)を発表しており、『高句麗考古』の都城関係記述の先駆をなす。
- 3 関 徳植は、これ以前に「高句麗の中期都城」(関 1989)で高句麗都城時期区分に独自の4時期区分を示していた。すなわち、早期：紇升骨城期、前期：国内城期、中期：安鶴宮城期、後期：平壤城(長安城)期、とする。
- 4 山城の築造年代という際には、城全体の築造年代という意味と、城壁に限定した議論とがある。前者にせまるには、まず、城壁の年代が最初の手がかりになる。
- 5 この議論においては、候補となる二つの遺跡の年代観がまず問題になる。この点を抜きにして、王宮比定の議論は進まない。安鶴宮の位置づけには、二つの側面がある。第一に、遺跡の年代観である。第二には、第一と密接に関連することであるが、遺跡の性格についてである。

参考文献

<日本語>

- 白鳥庫吉 1914 「丸都城及国内城考」『史学雑誌』25編4號、5號
- 鳥居龍蔵 1914 「丸都城及国内城の位置に就きて」『史学雑誌』1914年7月號
- 関野 貞 1914 「滿洲輯安縣及平壤附近に於ける高句麗時代の遺蹟」『考古學雑誌』5卷3號
- 関野 貞 1920 「丸都城考」『大正六年度古蹟調査報告』朝鮮総督府
- 関野 貞 1928 「高句麗の平壤及長安城に就いて」『史学雑誌』39編1號
- 関野 貞 1922～1923 「朝鮮の瓦模様」『建築世界』16卷7・8・11・12號、17卷2・4・5・7號、のち「朝鮮の瓦文様」と題目を変え『朝鮮の建築と藝術』(1941)に収録。
- 田中俊明 1991 「朝鮮三国の都城制と東アジア」『古代の日本と東アジア』小学館
- 田中俊明 1995 「前期・中期の王都」「後期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』(東潮・田中俊明編著)中央公論社
- 田中俊明 1998 「高句麗の前期王都卒本の構造」『高麗美術館紀要』2号
- 田中俊明 2009 「朝鮮古代都城と中国都城」『都市と環境の歴史学』2集 中央大学東洋史学研究室

梁 正錫 2012 「古代東アジアにおける宮殿の系譜—高句麗と渤海を中心に—」『ICIS 国際シンポジウム 周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」—歴史学・考古学研究からの視座』関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)

<朝鮮語 韓国語>

社會科學院歴史研究所

1979 『朝鮮全史 3 中世編 高句麗史』科學、百科事典出版社、

朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会

1989 『朝鮮遺跡遺物図鑑 3 高句麗篇(1)』

閔 徳植 1989 「高句麗の中期都城」『韓國史論』19

閔 徳植 2005 「高句麗の都城」『韓國の Global Pride 高句麗』高麗大學校博物館
<中国語>

魏 存成 1985 「高句麗初、中期都城」『北方文物』1985-2

魏 存成 1994 『高句麗考古』吉林大學出版社、

魏 存成 2002 『高句麗遺迹』文物出版社

第3章 高句麗瓦の編年

本章では、高句麗瓦編年研究史をたどった上で、平壤と集安それぞれの地域別編年を述べ、両地域を統合して、高句麗全体の瓦編年をしめす。

第1節 高句麗瓦編年研究史

高句麗瓦をふくめた朝鮮瓦の研究史全般をあつかった井内功による論文は1981年までを扱う(井内 1991)。その後の調査研究、特に、新たに知られた韓国地域の高句麗遺跡の瓦を含めた高句麗瓦研究史は、沈 光注(沈 2005)や白 種伍(白 2006)が詳細に検討する。

ここでは、これらを参考にしながら、特に高句麗瓦の編年をめぐる研究史をあとづける。

(1) 第二次大戦前の研究

第二次大戦前の研究は、日本人によって独占された。とりわけ、朝鮮半島を中心とする建築史、考古学、美術史研究の基礎を構築した関野 貞の研究は、高句麗瓦研究で、ほぼ唯一のまとまった研究である。

関野の高句麗瓦の変遷にかんする記述は多数あるが、最もまとまっている「朝鮮の瓦模様」(関野 1922)によって、関野の見解は次のように要約される。

すなわち、蓮花文瓦の変遷について、輻線をもつものと、もたないものに分類したうえで、前者を「本格的に古い」ものとし、土城里や、平川里などから出土するものをあげた。また、後者の輻線をもたないものは、現在の平壤市街を中心によくみられることをあげ、「高句麗末期」とみた。このように、分類とその変遷にかんする記述は大まかである。なお、関野の研究方法では、建築をはじめ、仏像などにおよぶ広範囲におよぶ研究対象に共通するのは、いわば様式論的な方法によることはすでに指摘されている(網 1997)。内容的には近いとはいえ、考古学的な型式分類とそれにもとづく編年を明確に意識しているわけではない。

平壤地域の高句麗瓦編年にかんして、重要な論点の一つに、平壤安鶴宮遺跡の瓦の年代をめぐる議論がある。関野は、当初、安鶴宮遺跡を、前期平壤城の王宮とみた。当然出土瓦もその時期とみたことになる(朝鮮総督府 1915、ここでは関野旧説と呼ぶ)。しかし、その後、関野は、瓦について、高句麗末期と見解を変えている(関野 1928、関野新説と呼ぶ)。それにともない、安鶴宮遺跡は高句麗末期の別宮とされるにいたった。安鶴宮遺跡の瓦にたいする関野の年代観に関しては、梅原末治がわずかに触れた(梅原 1934)以外には、ほかに言及がみられない。

(2) 第二次大戦後の研究

第二次大戦後は、日本人の研究に、中国、北朝鮮、韓国における研究が新たに加わる。高句麗瓦編年に関する各国の研究をみる。

まず、日本での研究としては、関口広次の瓦当文様ごとの変遷に言及した研究がある(関口 1977)。その後、田村晃一は、集安に所在する高句麗大型積石塚の編年研究の有力な手掛かりとして、採集されている瓦当を取り上げ、先述したような関野の考えを受けつぎ、輻線蓮花文瓦当の変遷をたどった。文様の詳細な分析により、型式を細分し、集安の太王陵、千秋塚、將軍塚の順に変遷をとらえ、広開土王陵をはじめとする王陵比定に重要な資料になることを示した(田村 1982, 1984)。この研究は高句麗瓦に対する初の編年研究であり、その後の研究を大きく進展させる端緒となった。

ついで谷 豊信(谷 1989, 1990)は、平壤土城里採集の輻線蓮花文瓦を中心に検討して、文様分析のほか、製作技法の検討をくわえ、田村の成果をさらに精緻に進め、土城里の瓦は、時期的には平壤遷都(427年)を前後する時期の瓦とした。

このように、輻線蓮花文をもつ瓦については、大きな進展があったが、輻線の失われた段階の蓮花文瓦については、検討は遅れた。

安鶴宮遺跡の瓦について、筆者は、始め関野の説（関野新説）にしたがって、高句麗末期と理解していたが、その後、韓国における研究を参考にして高麗時代の瓦と理解するにいたった（千田 1983、1996、2005）。なお、安鶴宮遺跡の瓦の年代にかんして早乙女雅博は問題が未解決であると認識する（早乙女 2005）。

次に北朝鮮の状況を見よう。

大戦後、多数の高句麗遺跡の所在する北朝鮮では高句麗関係遺跡の調査研究に大きな力を注ぐ。

瓦編年との関わりで重要な遺跡は安鶴宮遺跡である。北朝鮮は1957年、いち早く安鶴宮遺跡を前期平壤城の王宮と位置付ける見解を発表している（蔡 熙國 1957）。安鶴宮遺跡は、のち、発掘調査が行われるが、この見解は、発掘が行われる前、すなわち、遺跡と遺物の関係が確定しない段階において出されていることに注意しておきたい。

その後、北朝鮮での高句麗瓦全般にわたる編年観を提示した記述では安鶴宮遺跡の瓦を高句麗とする点で共通する（金 榮措 1964、ユン グワンス 2001、金 ヨンジン 2003）。

韓国での高句麗瓦の全般にふれた研究は白種伍の研究がほぼ唯一である（白 2006）。中国での高句麗瓦の研究をみる。中国での高句麗瓦に関する調査研究は多くの高句麗遺跡が存在する集安の出土資料を対象にする。

卷雲文瓦は4世紀代を中心として集安地域でのみ出土する瓦で、早く李 殿福による紹介があり、集安の積石塚の年代推定の資料としてとりあげた（李1980）。卷雲文瓦当、蓮花文瓦当をふくめた集安の高句麗瓦全体の編年をあつかった研究は、林至徳・耿 鐵華が最初である（林・耿1985）。

卷雲文瓦をめぐる近年の動向では、世界遺産登録に関連する集安の遺跡調査（吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004）により飛躍的に増大した資料をもとに多くの研究があらわれる。

卷雲文瓦の研究は第二次大戦後に登場した新たな分野であり、高句麗瓦の検討範囲が拡大した。卷雲文以後の瓦でも、世界遺産登録に関連する遺跡調査の成果をもとに、蓮花文、獣面文瓦などに関して製作技法を加味した新しい研究があらわれている（王 飛峰・夏 増威 2008）。中国の研究では、高句麗瓦の年代観の大枠は、林 至徳・耿 鐵華（林・耿1985）の見解を基本的に踏襲している。

第2節 平壤地域の高句麗瓦編年

本節では、先述した研究史をふまえ、とくに清岩里土城とその出土瓦を中心に検討し、平壤地域での高句麗瓦編年を述べる。

平壤地域の遺跡の発掘調査による出土資料を基本とし、採集資料をも参考資料として扱う。

(1) 蓮花文瓦の分類

編年にあたって、瓦当文様の分類の指標を瓦当面での瓦当文の配置の仕方、具体的には瓦当面における文様の分割方法におき、まず輻線の有無で大きく2大別するところから始める。

① 輻線蓮花文瓦

輻線の様相によって、さらに2類に細別する。

輻線蓮花文1類

瓦当中央の半球形の中房から放射状にのびる2本ないし3本一組の直線により瓦当面を分割する。区画の数は、6区画が多く、4区画、8区画もある。

区画のなかに、2個の珠文の間に立体的な表現の蓮花文、すなわち蓮蕾文を配置する。

輻線の中房側と周縁側に圏線をめぐらす。これを内圏線、外圏線とよぶ。いずれも2重にめぐるのが基本である。

輻線蓮花文2類

輻線が1本になったり、外圏線または、内外圏線が1重になったり、あるいは外圏線を欠くものもある。蓮蕾文に他の装飾(「充填文」)(註1)が加わるなどバラエティに富む。1類の定型が崩れたものと理解する。

②輻線のない蓮花文瓦当

蓮花文の配置方法により2つに細別する。

主要文・従属文交互配置類

この種の文様は、立体的な表現(「主要文」とよぶ)と平板な表現の文様(「従属文」とよぶ)からなる(註2)。この平板な表現の従属文は瓦当面を区画していた輻線に由来するものと考えている。

単一蓮花文配置類

蓮華文が多弁化するものや、奇数弁の配置が現れる。先述したように従属文が、かつて輻線のあった位置に交代したという想定からすると、蓮花文1種類だけで瓦当文が構成されるようになるのは、平板な従属文という意識が完全に消滅したことを反映しているとみる。また、輻線のある段階、そして主要文・従属文の段階までは区画の数、あるいは主要文、従属文の数が偶数であったのに対し、九弁など単一文様での奇数弁の出現は、そうした主要文、従属文の意識が完全に薄れたことを意味しよう。

(2) 蓮花文瓦当の編年

上記の分類は多分に時間的な変化と対応することを想定して記述した部分がある。ここで改めて次のように平壤地域の蓮花文瓦当の編年を、平壤蓮花文瓦1~3期という形で表す。

平壤蓮花文瓦1期

輻線1類の段階に対応する。

古くから土城里や平川里で多量に採集されている資料が代表的である(朝鮮総督府1929)。

平壤蓮花文瓦2期

輻線2類の段階に対応する。

清岩里廃寺の蓮花文瓦はすべてこれに該当する。

平壤蓮花文瓦3期

2小期に細分する。

3-1期 主要文・従属文交互配置類の段階

大城山城

3-2期 単一蓮花文配置類の段階

大城山城

(3) 蓮花文瓦の年代

この編年における各段階の年代の推定に関して、出土遺跡との関連で述べよう。

平壤蓮花文瓦1期

まず、清岩里廃寺の瓦は、第2期に属するものだけであるの対して、大城山城の瓦は1期、2期、3期とも認められる。大城山城の瓦で最も古いものは1期に属する。大城山城は、427年の平壤遷都にもなって築造されたと考えられるから、この遺跡の瓦の発掘資料の上限年代とすることができる。大城山城の1え期の瓦は5世紀前半の瓦とすることができる。ただし、この段階の瓦のスタイルは集安地域で出現し、定型化したものであって、大城山城に先行する要素をもつ型式が平壤地域でも土城里などの採集品のなかにある(千田1994)。すでに説かれているように、この段階の瓦当は平壤地域においても427年の平壤遷都以前に始まるものであろう(谷1990)。

したがって、平壤1期の上限は、後述する集安地域の様相を加味すると、4世紀後半まで

さかのぼるものであろう。

このようにして平壤 1 期は 4 世紀後半から 5 世紀前半の年代を推定する。

平壤蓮花文瓦 2 期、3 期

2 期の年代は、3 期の年代推定と密接に関連しているので、一緒に扱う。

まず、2 期の年代については、上限が 5 世紀前半である。問題は下限である。このさい清岩里廢寺の瓦が問題になる。

発掘報告(小泉 1940)では清岩里廢寺を文献史料にみえる 497 年創建の金剛寺にあてる考えを示した。『三国史記』文咨明王 7 年<497>の「秋七月創金剛寺」および『新增東国輿地勝覽』、『高麗史』および現地の地名(金剛灘ほか)などを根拠とした。本遺跡の状況からみて、本遺跡が高麗時代の史料にみえる金剛寺である可能性は高く、金剛灘などの地名は高麗時代の寺院名が伝わったものとするのが常識的な解釈と考えられよう。しかし、高麗時代の記録に見える金剛寺が高句麗時代の金剛寺と同一だとする根拠にはならない、というべきであって、三国史記の記事から、清岩里廢寺を金剛寺にあて、その出土瓦を 5 世紀末に考えるのは、本末転倒であろう。

次の第 3 期の年代の推定によって、2 期の下限を推定することになる。

3 期の年代推定に触れる。この時期の瓦については、発掘資料が乏しいため、採集資料を援用して推定せざるを得ない。この段階の瓦は、古くから平壤、すなわち後期平壤城域からの採集資料(註 3)に多くみられることからひとまず、586 年の遷都年代が一つの基準になる。ただし、後期平壤城の築造自体は遷都に先立つ 552 年から始まっていることが文献史料にみえ、また、後期平壤城の銘文城石からは 566 年の築造工事が確認される(田中 1995)。したがってこうした銘文遺物からも上限を 6 世紀中頃までは押し上げることができ、さらに後期平壤城域での採集瓦(図 43)などの状況を援用すると、幅をもたせて、6 世紀前半までとみることができよう。

こうして、2 期の上限年代を 5 世紀後半に、また下限については、6 世紀前半に推定できることになった。

3 期は、上限を 6 世紀前半に、下限を高句麗滅亡の 668 年、という幅の中で理解できると考える。さらに、3 期の細分と年代については、3-1 期を 6 世紀前半から 6 世紀後半に、3-2 期を 6 世紀後半から高句麗滅亡の 668 年まで、と推定する。

以上を図示したのが図 52 である。

なお、平壤地域で多様に展開する蓮花文以外の文様の瓦当についても蓮花文瓦当の変遷を軸にした上記の編年に準じ年代的な位置づけをすることが可能である。

第 3 節 集安地域の高句麗編年

本節では、集安地域の編年研究史をたどった上で、卷雲文瓦当、蓮花文瓦当、の順に編年を検討し、最後に集安地域全域の編年を提示する。

卷雲文瓦は、以下に述べるように、蓮花文瓦に先行する瓦当であって、集安地域のみで出土し、平壤地域などほかの高句麗域ではまったく出土が知られていない。

(1) 集安高句麗瓦の編年研究略史

先に中国での高句麗瓦研究史にふれたが、ここでは中国以外の研究もふくめて集安での高句麗瓦編年研究史の概略を述べる

卷雲文瓦に関しては、早く李 殿福が集安の積石塚の年代推定の資料としてとりあげ(李 1980 年)、その後、新資料を加え、分類、年代観を示した(李 1984 年)。田村晃一による集安の大型積石塚をめぐる一連の研究でも卷雲文瓦は蓮花文瓦とともに、古墳の年代推定に重要な資料とされた(田村 1982、1984)。

このような研究を経て、1985 年に、林 至徳・耿 鐵華によって、卷雲文瓦、蓮花文瓦を

ふくめた集安の高句麗瓦の編年を論じた研究につながる(林・耿 1985)。

近年の動向では、世界遺産登録に関連する集安の遺跡調査(吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004)により増大した資料をもとに多数の研究があらわれる。編年にふれた主な研究をあげると、張福有(張 2004)、東潮(註 7、東 2005)、桃崎祐輔(桃崎 2005)、宋桂鉉(註 9、宋 2005)、孫仁杰(孫 2005)、姜賢叔(姜 2006、2007)、耿鐵華(耿 2007)、金希燦(金 2008)、朱洪奎(朱 2010)などがある。筆者もこれらの研究を参考に、2012年にかつての研究(千田 1994)を改訂して卷雲文瓦当の編年を提示した(千田 2012)。

(2) 卷雲文瓦期—卷雲文瓦の編年と年代

卷雲文瓦の主文はいうまでもなく、卷雲文であるが、卷雲文瓦の多くに年号や干支などの銘文をもつものがあることも大きな特色であり、それらを並べるだけでも。ある程度の変遷をうかがうことが可能であり、これまでの研究の多くはそうした方法をとっている。

筆者は、銘文も文様の一部としてあつかい、文様構成に重点をおいた分類をおこない、全体の変遷をさぐることにする。銘文をもたない瓦当もふくめた卷雲文瓦全体を整合的に理解することをめざすためである。

卷雲文瓦の分類では、筆者は、かつて、A類、B類、B'類を設定した(千田 1994)。ここでも、それを踏襲するが、B'類については、その後完形品が出土し、またその類例が多数知られことにより、B'類もふくめ全体の分類をあらためて定義することにしたい。

各分類と代表的な例をあげる(図 49)。

分類の大別

まず、連弧文の有無でA、B類に2分し、さらにB類のくずれたB'類を設定する。

A類： 連弧文をもたないもの。

「太寧四年」瓦当(「通溝城」)

B類： 連弧文をもつもの。

鋸齒文帯の有無で細分する。

a類 鋸齒文帯をもつもの。

b類 鋸齒文帯をもたないもの。

B'類：B類のくずれたもの。

変遷にかかわる属性の検討

上にあげた大別は、大筋でその順に変遷すると考えるが、上の大別にあげた以外の属性についても卷雲文瓦の時期的な変遷とのかかわりで、個別に検討する。

①分割線

中房から周縁にむかって放射状に伸びる直線で、瓦当面を分割する。分割線は1本が多いが、B類の一部(「十谷民造」瓦当、「乙卯」瓦当)では2本一組、B'類では、3本一組をなすものもある(千秋塚南)。多くは8分割であるが、一部に4分割(「乙卯」瓦当)、6分割(「十谷民造」)もある。3本の例では、3本が周縁まで連続するものと、連続しないものがある。後者では雲文の巻がその線から派生する形をとるものがある(麻線 2100号墓)。

②卷雲文

瓦当面は分割線により多くは8分割をなす。主文をなす卷雲文をとりだすと、B類の多くは、雲文の巻が外に向かって右巻、左巻が各4単位を交互に配置し瓦当面全体は8分割をなす。

ところで、A類では、瓦当面を線で8分割しているように見える。しかし、別の推測もできるのではないかと。というのは、中房よりの分割線を太く表現している点に注目すると、この瓦当は、本来4分割であった名残ではないいかとも推測できよう。このようなA類の雲文の様相は卷雲文の祖型とみられる漢代の卷雲文(蕨手文)により近い様相を呈する。A類をB類に先行するとみる理由のひとつである。

③鋸齒文

Bb類を除いて、すべて周縁を鋸齒文帯とする。鋸齒文の表現には、隆線で細かい鋸齒を

表現するものと(A類とB類の一部<「月造記」瓦当>)、隆線のあいだの平面も高く残すもの(B類の大部分)、すべて沈線で表現するもの(B'類の大部分)がある。鋸歯文帯の幅も狭いA類から広いB類、B'類へと変化しており、大きくはこの方向で変遷したとして無理がない。

④連弧文

8分割で曲線をなしているが、4分割、6分割では、曲線ではなく「へ」字状の表現である。連弧文と周縁とのあいだには、文字または記号を配する。B'類には直線化しているものもある。この例では、直線は周縁と接しており、周縁とのあいだに文字や記号を入れる余地はない。

以上をまとめると、弧線→「へ」字状→直線、という変化の方向を想定できる。

⑤銘文

銘文は、A類、Bb類以外は銘文帯をなす。連弧文と周縁とのあいだに文字を置く。連弧文瓦の場合は、文字は連弧1単位に1文字が多いが、4文字の例もある(「十谷民造」瓦当)

以上のように、卷雲文瓦を、瓦当文の特徴により、A、B、B'の3種に細分する。

編年にあたっては、卷雲文瓦の時期は、全体として卷雲文瓦期とし、A、B、B'をそれぞれ1、2、3期として細分しておきたい。

卷雲文瓦当全体を次のように分期する。

卷雲文瓦1期：卷雲文瓦A類

卷雲文瓦2期：卷雲文瓦B類

卷雲文瓦3期：卷雲文瓦B'類

卷雲文瓦の年代推定

卷雲文瓦には、年号または干支の銘文を有するものがあり、年代推定に有力な手掛かりとなる。以下にしめすように、「太寧四年」瓦当を最古に位置付け、他は、この型式からの変化型式と想定して、次のように年代を推定する。

A類の「太寧四年」が325年または326年、干支銘では、B類の「己丑」が329年、「乙卯」が355年、「丁巳」が357年、に比定できることから、卷雲文瓦は、4世紀前半に始まり、4世紀中頃から後半にかけて盛んに用いられたことがわかる。卷雲文瓦の終末の年代推定に参考になるのは、千秋塚における卷雲文瓦の様相である。千秋塚では、卷雲文瓦B'類が多量に出土する(『集安高句麗王陵』)。千秋塚で注目されるのは、のちに述べる輻線蓮花文1類も出土していることである。大型積石塚で、卷雲文瓦当と蓮花文瓦当がともに出土しているのは、千秋塚に限られる(表2)。問題は、卷雲文瓦の終末と蓮花文瓦の出現が先後関係にあるのか、時期的に併存するのかわかるが、両者の詳細な出土状況が不明なので判断できない。しかし、B'類が卷雲文瓦の最終末の型式であること、また卷雲文瓦全体の変化の方向がA類→B類→B'類であることを傍証する点でも重要である。あえてB'類の年代を推定するならば、4世紀後半とみて大過ないと思われる。

(3) 蓮花文瓦期—蓮花文瓦の編年と年代

卷雲文瓦に続く瓦編年は蓮花文瓦期としてとらえることができる。

ただし、集安地域では、蓮花文瓦期とした時期には、忍冬文、獣面文の瓦当の存在も顕著であり、それらを含めた編年作業をおこなう。

まず、山城子山城を軸に、多数の型式を共有する通溝城の出土瓦とともに、出土状況をふまえ編年作業を試み、その後、他の遺跡の資料を加え、集安全域の蓮花文瓦編年に及ぶことにする。

①山城子山城における瓦の編年

1) 山城子山城における瓦の出土状況

山城子山城は、通溝城の北西約3キロメートルに位置する周囲約7キロメートルにおよぶ大規模な山城である。石築城壁、城門址(7か所)のほか、城内には、池址、建物址、古

墳などの遺構がある。

近年の調査で、瓦をともなって検出された遺構は、次の5か所である。遺構の名称を『丸都山城』によって示す。

宮殿址、瞭望台址、戍卒居住址、1号門址、2号門址

瓦当が出土したのはこれらのうち、「戍卒居住址」を除く4か所である(図16)。

出土した瓦当の種類を『丸都山城』によって示すと、獣面文(A、B、Bb、C)、忍冬文(細分なし)、蓮花文(A、B、C)の大別3種、細別では合計8種である。

これらの瓦当と出土遺構との関連は後で触れる通溝城出土瓦当とともに、表1に示した。これによって、遺構ごとの瓦当の種類(細別)をみると、宮殿址の8種が最も多く、2号門址の5種、1号門址の4種、瞭望台3種の順となる。

『丸都山城』以前の発掘調査で出土した山城子山城出土瓦当として図をともなって報告されたのは獣面文瓦当(『丸都山城』の獣面文Ba型)がある(李殿福1982)。このほか、戦前の採集資料にも山城子山城出土と伝える資料の報告がある(朝鮮総督府1915、池内1938)。

2) 獣面文瓦、蓮花文瓦、忍冬文瓦の分類

山城子山城出土瓦の位置づけにあたっては、多くの型式を共有する通溝城出土瓦との比較が最も重要である。

通溝城は、一辺約700メートルのほぼ方形に石築城壁をめぐらし、城壁には城門、馬面などの施設が設けられた(図23)。

通溝城については、第二次大戦前における踏査(池内1938)の後、大戦後に小規模な発掘(集安縣文物保管所1984、董峰1993、吉林省文物考古研究所・集安市文物保管所2003)がおこなわれ、瓦が出土しているが図示を欠く。

近年、山城子山城とともに実施された大規模な発掘調査によって多くの情報がもたらされた。ここでは、その報告『国内城』(2004年)を中心にして、出土瓦の概要をみたい。

この調査では城内を中心に、通溝城全域に設けられた発掘地21か所のうち13から瓦当が出土した(図23)。

瓦当文を大別でみると、山城子山城と共通する獣面文、蓮花文、忍冬文のほか、山城子山城には出土しない卷雲文瓦があり、また、渤海時代に降る瓦当も出土している。

瓦文様の比較に際して、『国内城』では通溝城出土の瓦当には文様の細別名がつけられていないので『丸都山城』の細分名を援用する。山城子山城には見えない型式や『丸都山城』でも細分名のついていない型式に対しては、便宜上、仮の細別名を付して検討する。

以下、文様毎に検討する。

まず、獣面文は、山城子山城で4種(このうち、Cは軒丸瓦当ではなく、日本の瓦の名称でいえば、鳥衾(とりぶすま)とよぶ道具瓦の一種に類似するが、便宜上、瓦当文の種類としてこれも含める。)あり、通溝城でも4種すべてが出土している。

蓮花文は、通溝城からは山城子山城の3種(A、B、C)のほか、山城子山城では知られていない種類(仮イ)が出土している。

忍冬文は、山城子山城では1種類(仮イ)のみであるが、通溝城では、山城子山城では出土が知られていない種類(仮ロ)があり、そのほか、卷雲文瓦、渤海瓦も出土している。卷雲文瓦については先述した分類名を示し、後者は、その存在を示すにとどめる(表1)。

3) 山城子山城と通溝城出土瓦の編年

上述した細別を基礎にして、山城子山城および通溝城出土の瓦当の編年的な検討をおこなう。

山城子山城および通溝城出土瓦は、そのみでは年代的な手がりはほとんどない。集安の高句麗瓦当に関する研究史をたどると、例えば、代表的な研究(林・耿1985)では、集安の高句麗瓦の年代的下限を平壤への遷都年代(427年)とするが、先述の平壤地区の瓦編年を合わせ考えると、このような考えは成立しない。以下では、考古学的資料の比較による編年作業にもとづいて年代推定をおこなう。

編年にあたっては、まず、瓦当全体に通ずる文様構成の仕方による分類をこころみ、次

いで、文様毎に、細別とその変遷を追い、相対編年に及ぶ、という手順を踏むことにする。

変遷の手がかりになる文様構成上の一番の特徴は、外圏線の有無である。獣面文、忍冬文、蓮花文を通じて、瓦当文様の変遷の方向を、外圏線の有る種類→無い種類へと推定する。つぎに、文様毎の細別の可能性について言及しよう。

獣面文は、4種知られており、通溝城でもすべての種類が出土している。外圏線の有る A、Ba と無い Bb とにわけることができる。なお、C については、先述したように鳥衾であり、編年的位置については別個の検討を要するので、ここでは触れない。

忍冬文は、通溝城では山城子山城に見えない種類が出土している(仮イ)。外圏線はない上に、忍冬文自体を比較しても山城子山城の忍冬文瓦当が 8 単位の忍冬文からなるのに対して、通溝城例は、文様単位数が少なく 4 単位かと推定する。

蓮花文は、通溝城では、山城子山城にない種類がある(仮イ)。A に似るが、中房の周囲に隆線による円圈を巡らす点が異なる。

このように、大きく、外圏線の有無によって、1期→2期、という変遷を推定する。つぎに、1期については、蓮花文の様相により、2種に細分できよう。すなわち、蓮花文の弁数が、9単位の種類(C)がある。奇数弁は偶数弁に遅れて出現すると考える。この中房の周りに隆線による円圈をめぐらす特徴に着目すれば、円圈のないAは、円圈のある(仮イ)と、このCに先行するものではないかと推定する。忍冬文は、外圏線の無い仮イが、2期に属するのはよいとして、外圏線のある(仮イ)は、この細分とはどう関連するであろうか。ここでは、忍冬文(仮イ)は、中房に、隆線による円圈をとともなうことから、第1期第二小期に該当すると推定しておく。

以上のように、山城子山城および通溝城出土の獣面文瓦、忍冬文瓦、蓮花文瓦は大別 2 期、細別 4 期に編年できる(図 50)。

4) 集安地域の蓮花文瓦の編年

蓮花文瓦については、目を集安全域にひろげると、山城子山城、通溝城にはみえない種類がある。それは、輻線蓮花文瓦である。太王陵、千秋塚、将軍塚などの大型積石塚から出土する瓦当である。

集安全域にわたる編年作業のためには、これらの輻線蓮花文瓦をふくめた蓮花文瓦全体をふくめて検討しなくてはならない。ここでは、筆者のかつての検討(千田 1994)を含めて集安地域の蓮花文瓦全体の編年をしめすことにする。

以下の分類は、平壤地域と共通するので、説明を略し、分類名をあげるにとどめる。

輻線蓮花文瓦の分類

輻線蓮花文 1 類

輻線蓮花文 2 類

輻線のない蓮花文瓦当の分類

主要文・従属文交互配置類:

単一蓮花文配置類

以上の分類により、集安蓮花文瓦当期全体を次のように大別 4 期に編年する。分類との対応関係は次のとおりである。

集安蓮花文瓦 1 期: 輻線蓮花文 1 類

集安蓮花文瓦 2 期: 輻線蓮花文 2 類

集安蓮花文瓦 3 期: 主要文・従属文交互配置類

集安蓮花文瓦 4 期: 単一蓮花文配置類

以上にしめした集安の蓮花文瓦の編年は、内容的には平壤地域の蓮花文瓦の編年と対応し、年代の推定の手順は、平壤地域の蓮花文瓦編年と共通する。

1 期は、4 世紀後半から 5 世紀前半に推定できる。4 期とした瓦は、平壤地域では後期平壤城域で多数採集されている。後期平壤城(長安城)は、586 年に遷都した都城であるが、遷都自体 552 年には決定されていて(『三国史記』陽原王 8 年条)、566 年に比定できる銘文城

石の存在からも、実際の築造が 6 世紀中頃に始まることが確認できる(田中 1995)。さらに、先にものべて後期平壤城域における採集瓦の様相を援用して、上限を 6 世紀前半までの幅でかんがえることができる。これにより 4 期の上限は 6 世紀前半と推定する。下限は、高句麗滅亡の 668 年となる。2 期の瓦は、その間、ほぼ 5 世紀後半から 6 世紀前半にかけて、3 期は 6 世紀前半から後半にかけてであろう。

以上の分類及び年代推定から、先述した山城子山城・通溝城における獣面文、蓮花文、忍冬文瓦の編年は、集安蓮花文瓦 4 期と対応し、4 期をさらに細分したことになる。

5) 集安における高句麗瓦の編年

ここまで検討してきた、卷雲文瓦期、蓮花文瓦期をふくめ、集安での高句麗瓦編年を推定年代とともに示すと次のようになる。

- 集安卷雲文瓦期 4 世紀前半～4 世紀後半
- 卷雲文瓦 1 期：A 類 4 世紀前半
- 卷雲文瓦 2 期：B 類 4 世紀前半～中頃
- 卷雲文瓦 3 期：B' 類 4 世紀後半
- 集安蓮花文瓦期 4 世紀後半～668 年
- 蓮花文瓦 1 期：幅線蓮花文瓦 1 類 4 世紀後半～5 世紀前半
- 蓮花文瓦 2 期：幅線蓮花文瓦 2 類 5 世紀後半～6 世紀前半
- 蓮花文瓦 3 期：主要文・従属文交互配置類 6 世紀前半～6 世紀後半
- 蓮花文瓦 4 期：単一蓮花文配置類 6 世紀後半～668 年

これをもとに、集安全体の編年は、次のように表すことができる。

- 集安瓦 1 期：卷雲文瓦 1 期
- 集安瓦 2 期：卷雲文瓦 2 期
- 集安瓦 3 期：卷雲文瓦 3 期
- 集安瓦 4 期：蓮花文瓦 1 期
- 集安瓦 5 期：蓮花文瓦 2 期
- 集安瓦 6 期：蓮花文瓦 3 期
- 集安瓦 7 期：蓮花文瓦 4 期

第 4 節 高句麗瓦の編年

ここでは、上で検討した平城、集安両地域の編年をもとにして、両地域を統合した高句麗瓦編年は次のように編成する。これまで述べてきた集安、平壤両地域の編年との対応関係、全体の推定年代を以下にまとめて示す。標式瓦を付した高句麗瓦編年図も参照されたい(図 53)。

高句麗瓦編年	集安瓦編年	平壤瓦編年	推定年代
高句麗瓦 1 期	集安瓦 1 期		4 世紀前半
高句麗瓦 2 期	集安瓦 2 期		4 世紀前半～4 世紀中頃
高句麗瓦 3 期	集安瓦 3 期		4 世紀後半
高句麗瓦 4 期	集安瓦 4 期	= 平壤瓦 1 期	4 世紀後半～5 世紀前半
高句麗瓦 5 期	集安瓦 5 期	= 平壤瓦 2 期	5 世紀前半～6 世紀前半
高句麗瓦 6 期	集安瓦 6 期	= 平壤瓦 3 期	6 世紀前半～6 世紀後半
高句麗瓦 7 期	集安瓦 7 期	= 平壤瓦 4 期	6 世紀後半～668 年

註

- 1 「充填文」の用語は、「高句麗瓦の計量化分析(Ⅲ)」(千田 1995)で設定した。
- 2 「主要文」「従属文」の用語は、「高句麗瓦の計量化分析」(千田 1993)で設定した。
- 3 『高句麗時代之遺蹟 圖版上册』(朝鮮総督府、1929年)に「平壤」と掲載されている多数の資料の採集地は大部分が後期平壤城域にあると推定できる。

参考文献

<日本語>

- 朝鮮総督府 1915 『朝鮮古蹟圖譜 第一冊』
 朝鮮総督府 1915 『朝鮮古蹟圖譜 第二冊 解説』
 關野 貞 1922 「朝鮮の瓦文様」『建築世界』16巻3号～17巻7号、のち1944『朝鮮の建築と藝術』岩波書店に収録)
 關野 貞 1928 「高句麗の平壤及び長安城に就いて」『史學雜誌』39編1号(のち關野 1944『朝鮮の建築と藝術』岩波書店に補充を加え収録)
 朝鮮総督府 1929 『高句麗時代之遺蹟 圖版上册』(古蹟調査特別報告第七冊)、濱田耕作・梅原末治
 1934 『新羅古瓦の研究』(京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十三冊)
 池内 宏 1938 『通溝 卷上』日滿文化協會
 小泉顯夫 1940 「平壤清岩里廢寺址の調査(概報)」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究會
 関口広次 1977 「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開—三国時代～統一新羅時代まで—」(1)、(2)『考古学ジャーナル』136、138号
 田村晃一 1982 「高句麗積石塚の構造と分類について」『考古学雑誌』68巻1号(のち田村 2001『楽浪と高句麗の考古学』同成社に収録)
 千田剛道 1983 「清岩里廢寺と安鶴宮」『文化財論叢』(奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論文集)、同朋舎
 田村晃一 1984 「高句麗積石塚の年代と被葬者をめぐる問題について」『青山史学』8号(のち田村 2001『楽浪と高句麗の考古学』同成社に収録)
 谷 豊信 1989 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察—墳墓発見の瓦を中心として—」『東洋文化研究所紀要』108号
 谷 豊信 1990 「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』112号
 井内 功 1991 『朝鮮瓦磚研究史』井内古文化研究室
 千田剛道 1993 「高句麗瓦の計量化分析」『第6回 考古学におけるパーソナルコンピュータ使用の現状』帝塚山考古学研究所
 千田剛道 1994 「瓦からみた高句麗古都集安」『高句麗都城と山城—中国東北地方における都城と山城に関する基礎的研究』(服部敬史・千田剛道・寺内威太郎・林直樹)の第2章、『青丘学術論集』5集 韓国文化研究振興財団
 田中俊明 1995 「後期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』(東潮・田中俊明編著)中央公論社
 千田剛道 1996 「色と文様の計量考古学—高句麗瓦の研究から—」『人文学と情報処理』11号 勉誠社
 千田剛道 1996 「高句麗・高麗の瓦—平壤地域を中心として—」『朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所
 網 伸也 1997 「明治三十年代における関野貞—美術史・建築史・そして歴史考古学の

- 黎明一」『考古学史研究』7号
- 早乙女雅博 2005 「関野貞と朝鮮考古学」『関野貞 東アジア踏査』（藤井恵介・早乙女雅博・角田宏編著） 東京大学総合資料館
- 桃崎祐輔 2005 「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会
- 千田剛道 2005 「高麗の瓦—平壤と開城の比較を中心に—」『高麗開城の文化遺産的価値と保存』イコモス韓国委員会
- 東 潮 2006 「高句麗王陵と巨大積石塚—国内城時代の陵園制」『朝鮮学報』199・200輯（のち東 2011『高句麗壁画と東アジア』学生社に収録）
- 桃崎祐輔 2009 「高句麗王出土瓦・副葬品からみた編年と年代」『高句麗王陵研究』東北亜歴史財團
- 朱 洪奎 2010 「高句麗積石塚出土卷雲文瓦の編年再検討」『古文化談叢』64集
- 千田剛道 2012 「集安高句麗卷雲文瓦の編年をめぐって」『第23回東アジア古代史・考古学研究交流会 予稿集』東アジア考古学会
- <朝鮮語 韓国語>
- 蔡 熙國 1957 「平壤付近にある高句麗時期の遺蹟—高句麗平壤遷都1530周年に際して—」『文化遺産』1957-5
- 金 榮摺 1964 「三国時期の瓦と磚文様」『考古民俗』1964-4
- ユン グワンス
- 2001 「高句麗瓦當文様の類型と変遷」『朝鮮考古研究』2001-4
- 金 ヨンジン
- 2003 「瓦磚」『高句麗遺物編』（『朝鮮考古學全書 34 中世篇11）社会科学出版社（白山資料院版）
- ユン グワンス
- 2004 「高句麗瓦の種類と形態」『朝鮮考古研究』2004-4
- 沈 光注 2005 「南韓地域出土高句麗瓦に対する研究」『韓國瓦研究の回顧と展望』韓國瓦學會
- 白 種伍 2006 「高句麗瓦の研究史的検討」『白山學報』74号
- 白 種伍 2006 『高句麗瓦の成立と王權』周留城出版社
- 宋 桂鉉 2005 「桓仁と集安の高句麗馬具甲冑」『北方史論叢』3号（高 正龍・井上直樹訳 2006『朝鮮古代研究』7号）
- 姜 賢叔 2007 「高句麗古墳出土瓦の変遷と研究」『韓國考古學報』64輯
- 金 希燦 2008 「高句麗卷雲文瓦當研究」『高句麗渤海研究』31輯
- <中国語>
- 李 殿福 1962 「1962年春季吉林輯安考古調査簡報」『考古』1962年11期
- 李 殿福 1980 「集安高句麗墓研究」『考古學報』1980年2号
- 李 殿福 1982 「集安高句麗山城子山城調査與考略」『文物攷古滙編』1期 吉林省文物工作隊
- 集安縣文物保管所
- 1984 「集安高句麗國內城址的調査與試掘」『文物』1984年1期
- 李 殿福 1984 「集安卷雲紋銘文瓦當考辨」『社會科學戰線』1984年4期
- 林 至徳・耿 鐵華
- 1985 「集安出土の高句麗瓦當及其年代」『考古』1985年7期

(緒方 泉訳 1988「集安出土の高句麗瓦当とその年代」『古代文化』40
卷3号)

- 董 峰 1993 「國內城中新發現的遺址和遺物」『高句麗研究文集』 延邊大學出版社
吉林省文物考古研究所・集安市文物保管所
- 2003 「吉林集安高句麗國內城馬面址清理簡報」『北方文物』2003年3期
- 張 福有 2004 「集安禹山三三一九號墓卷雲紋瓦當銘文識讀」『東北史地』2004年1期
吉林省文物考古研究所・集安縣博物館
- 2004『國內城』文物出版社
吉林省文物考古研究所・集安縣博物館
- 2004『集安高句麗王陵』文物出版社
吉林省文物考古研究所・集安市博物館
- 2005「洞溝墓群禹山墓區 JYM3319 號墓發掘報告」『東北史地』2005年6期
- 耿 鐵華 2007「集安出土卷雲紋瓦當研究」『東北史地』2007年4期
- 王 飛峰・夏 增威
2008「高句麗丸都山城瓦當研究」『東北史地』2008年2期

第4章 高句麗都城関係遺跡の検討

本章では、高句麗都城関係の遺跡を、桓仁、集安、平壤の地域ごとに検討する。

検討の主眼を遺跡の年代の確定におき、そのうえで、主として平地城、山城の様相を検討し、都城観連遺蹟として寺院址にも触れる。

第1節 桓仁地域の都城関係遺跡

高句麗初期の都城は桓仁であり、この地域での調査成果を検討する（図2）。

研究史の概略は先にも触れたが、五女山城を中心にして桓仁地区の都城関係遺跡の調査研究史をやや詳細に振りかえり、近年の大規模調査の成果を検討する。

(1) 研究史—大戦前～大戦後の調査研究

高句麗建国の地は文献史料には「卒本」（三国史記）（忽本・紇升骨城とも）とみえる。「卒本」の現地比定に関してはそれまで諸説あったが、卒本を桓仁の地とし、紇升骨城を五女山城にあてる白鳥倉吉の説（白鳥 1914）に落ち着く。

桓仁を訪れた研究者は、鳥居龍蔵が最も早い。鳥居は、1905年、集安とともに、桓仁を訪れ五女山城などを踏査した。ただし、鳥居は、五女山城を『東國輿地勝覽』にみえる「兀刺山城」とみて「國內城」にあてていた（鳥居 1976）。

鳥居のほか、大戦前に桓仁を訪れた日本人研究者は、黒田源次（踏査 1936）（藤田亮策 踏査 1943）、三上次男（踏査 1944）などで、五女山城などを踏査している。このうち、三上次男がもっとも詳しい記録を残している。

三上の記録の公表は、大戦後になる（三上 1946、1990）。

三上は五女山城の見取図（図3）を作成し、遺跡について次のような観察を行なっている。

- ①五女山城は、玄武岩を主体にした岩塊からなる。
- ②頂部は平坦で、南北に細長い（最高所は標高 820m）。
- ③頂部東側の中腹に石築城壁があり、門を開く。
- ④城内の採集遺物は、遼金代のもので、高句麗時代の遺物はみあたらない、

こうした観察にもとづき、城の年代に対して疑問を呈するとともに石築城壁についてつぎのように疑問を述べる。

「なぜ地形の堅固な東壁にのみ城壁を築き、守るに難い西側岸壁になんらの施設も施さなかったのか」

三上に先立ち、黒田源次もわずかながら記録を残している。黒田は頂部において布目瓦の散布を確認していることにも注意しておきたい（黒田 1937）。

上述のように大戦前には踏査にとどまっていた五女山城に発掘の手が加わったのは 1986年、山頂部における鉄塔建設にともなう調査が最初であろう。この調査報告で、五女山城の地形図が初めて公表されるとともに、高句麗時代にぞくする土器、漢代とされる鉄製武器などの出土遺物の実測図も掲げられた（梁 志龍 1992）。この調査は、先に三上が投げかけたこの遺跡の年代に関する疑問を払拭することとなる。

この成果を紹介した田中俊明は、現存城壁が高句麗前期までさかのぼるかは、未確認とし、山城としての使用開始と現存城壁の築造時期は、かならずしも同じではない、と述べ、「頂上部を守るためには、頂部の亀裂部分を守ればじゅうぶんで、絶壁をよじのぼることはほとんど不可能である。まさに天然の要害であり、ことさら城壁を築かなくても良いとも思える。あるいは当初は、城壁を築かなかったかもしれない」とする（田中 1995）。

さらに田中は、「東門付近の城壁は、積石塚の基壇部の発展過程などをふまえると、四世紀後半までくだらせて考える必要があるのではなからうか。」と指摘する。これに関しても後の記述で触れよう。

また、三上のなぜ、東側だけに城壁があるのかという疑問にたいしては、「東側をより重視していたあらわれ」とする解釈を示している。

(2) 近年の調査成果—五女山城の大規模調査と平地城の探求

五女山城に対しては、その後、しばらくは、調査がなかったが、近年になって、世界遺産登録にともなう組織的な調査（1996～2003年）によって、頂部の南半部中心に発掘が行われ、青銅器時代から金代までの5期にわたる多数の遺構、遺物が見出された（図4～11）。このうち、高句麗都城と関係する第3期文化（高句麗早期）および第4期文化（高句麗中期）では、少数の礎石建物、多数の竪穴（兵営、住居と推定）、とともに多量の鉄製武器が出土した穴蔵とみられる土坑も見出された。これらによって、五女山城が高句麗時代の防禦に関わる遺跡であることがいっそう明確になったといえよう。

この調査では、詳細な地形図のほか、石築城壁や門址の実測図が公表されたことの意義も大きい。

調査報告書『五女山城』の刊行によって、五女山城の資料をもちいた研究が多数発表されることになる。

次に、五女山城とセットをなす平地城の調査研究の動向をみよう。五女山城とセットをなす平地の王宮のおかれた城郭としては、下古城子土城のほか、あらたに、現在ダムに沈んでいる蜷蛤城が紹介された（梁 1992）。

(3) 五女山城の遺構と遺物の検討

ここでは、高句麗に関係する第3期文化および第4期文化を対象に主として遺構の年代に焦点をしばって検討することにする。

山頂部と山腹に分けて遺構、遺物を検討する。『五女山城』では山頂部の発掘区をⅠ～Ⅴ区と名付けている（図4、5）。

<山頂部の遺構>

第3期文化とされる主要な遺構は、礎石建物1箇所、半地下式の住居3箇所、土坑3箇所である。

1号大型建築址(J1、Ⅱ区)（図6）

長方形平面（規模13.8×6～7.2m）で、前面に礎石6箇所残るが、後面は後の遺跡により破壊されており、本来の礎石の数は不明である。土器はないが、五銖銭、大泉五十銭各1点が出土した。

次に、住居址、土坑出土の土器をみる。ここでは、年代的な検討をめざすので、複数器種の一括出土例を中心にあつかう。

F47(Ⅳ区)は円形住居で、完形品を含む5点の土器が報告された（図6）。土器の特徴をみると、縦方向の耳のつく器形（図6-4、6）と横耳のつく器形（図6-7）の両者がある。

第4期文化

報告書では、第4期文化は、五女山城において最も内容の豊富な文化であるとして、重要なものとして、2、3号大型建築址、兵営遺址、哨所遺址、居住址などをあげている。

これらの遺構のなかから複数器種の土器を出土する事例をあげる。

2号大型建築址(J2)（図7）

J2は山頂部南西よりに位置する。長方形平面（規模24.5×16m）。土器は鉄器類（武器、馬具、など）とともに出土したもので、横耳をもつ器種（図7-4）が含まれる。

3号大型建築址(J3)（図9）

J3は山頂部南東よりに位置する。長方形平面（規模20.6×8m）で、長辺が短く張り出す。土器は鉄器類（武器、馬具、武具など）とともに出土した。土器は横耳をもつ器形を含む。ここからは特に大型の器種が出土した（図8-2・4）。

このほか、オンドルをもつ多数の住居址があり、出土遺物は以上と同様の武器などを含む鉄器類とともに土器も出土している。土器は、以上の2箇所の建築址出土土器と共通す

る特色をもつ。

山頂部西側には西門址がある(図 11)。報告書ではどの文化期にぞくするかの記事はみあたらない。両側の石築城壁の間に約 3m幅の門道がひらき、門扉の小礎石(間隔約 3.3m)が遺存している。

<山腹の遺構>

山頂部の東下の谷を中心に石築城壁が南北に延びる。城壁には2箇所の開口部があり門址(東門、南門)とされる(図 5、9、10)。

この城壁をめぐるのは、その築造年代が最大の問題である。『五女山城』では、第3期文化(高句麗早期)に属すると述べる。しかし、発掘前から、それより新しいのではないかとする意見がある(三上 1946、田村 1988)。代表的な意見を紹介すれば、城壁の下半部が階段状をなす積み方(田村晃一は「逡減式」とよぶ、田村 1988)をしており、積石塚の発展段階からみて4世紀後半以降のものではないか、というのである(田中 2009)。筆者は、後述するように、石材の積み方として特徴的な「整層積み」がみられることから、集安山城子山城の石築城壁の築造年代から推して、築造の上限は6世紀後半を遡ることはない、と考えている。

(4) 平地城の探求—下古城子土城と蝸蛤城—

高句麗前期の平地城については、まず大戦後に下古城子土城が候補にあげられ、その蝸蛤城も登場し議論になっている。高句麗都城関係の著述では、下古城子土城を五女山城とセットをなす平地城とする例が多い。

① 下古城子土城

下古城子土城は五女山城の西側、桓仁の市街地の西北約3km、渾江西岸に位置する。

下古城子土城は1998年に初めて発掘され、その報告が『五女山城』に掲載された。この発掘以前にはなにか測量調査がおこなわれており、その数値が刊行物に散見する(魏 存成 1994 ほか)が、城壁の長さなどの数値がまちまちであり、実測図も公表されてこなかった。

『五女山城』によると、平面形は横長の方形で、東辺は渾江の流れにより失われているが、他の三辺の城壁は現存高1~2mほどである。北面城壁は現存長240m、西面城壁は170m、南面城壁は現存長205mである。現在は、遺跡に集落(下古城子村)が重なっている。西面北よりには南北に連なった窪地があり、かつての濠の一部かとも思われる。

西面城壁北よりの城壁断面は、現状で幅15m、高さ3mの弓状を呈する版築状の城壁であることが確認された(図 12)。

出土遺物については、城壁下の土坑(H1)から土器が出土していることが注目されよう。このほか、城内からは土器や石器などの遺物が採集されている。この土坑は、層位的に、城壁の築造に先行することが明らかであり、この土坑に含まれる遺物は、城壁築造の上限を示す決め手となる重要な資料となる。

報告書は、この土器により、築造年代を高句麗建国初期に併行か、あるいは遅い一時期とする。この点は重要である。というのは、これまで、下古城子土城のような方形の土城は高句麗の伝統にはなく、漢の郡県が撤退したあと、漢の県城を高句麗が奪取して再利用した、とうけとめられてきたからである(魏 1988、田中 1995 ほか)。集安通溝城で石築城壁の内部に検出された土築城壁もその一例とされてきた。

この下古城子土城の土器をめぐるのは、あとでもう一度ふれることにして、次に、もう一つの平地城である蝸蛤城に言及する。

② 蝸蛤城

蝸蛤城を最初に紹介したのは梁 志龍である(梁 1992)。梁によれば、蝸蛤城は、現在、五女山城の東方のダム(渾江水庫)に沈んでおり、一辺約200mの石城で、その石材は、高句麗城郭に特徴的な三角錘状をなすという。この紹介をうけて田中俊明は、蝸蛤城を

前期都城を構成する平地城の可能性が高いとみて、あるいは、漢（玄菟郡）の県城（土城）を転用したものではないかと推定し、高句麗時代の石築城壁の下層に土城が存在する可能性をあげた（田中 1998）。この城については、梁による再検討が進行中であり、成果が待たれる（梁 2008）。

さて、五女山城とセットになる王宮の所在する平地城としてはこのいずれがふさわしいかについては両説あることは上述のとおりである。田中によれば、両者の位置関係からみて、高句麗初期の根拠地である富爾江、渾江合流点にちかい蝸蛤城のほうが、広開土王碑文に「于沸流谷忽本西、城山上而建都」とも合致し、可能性が高い、とする（田中 2009）。下古城子土城は同じ渾江流域に所在し、年代的には合致するが、五女山城からは西側になり、位置的にはそぐわない、ということになる。

(5) 五女山城、下古城子土城、高句麗積石塚古墳群の土器の比較

桓仁の高句麗古墳は、初期の高句麗都城を考える際に重要となる。高句麗前期にあたる高句麗古墳は、積石塚であり、とくに集安、桓仁にはその初源的な積石塚が存在する。桓仁で、従来から知られてきたのは、五女山城の東側、蝸蛤城の近くにある高麗墓子古墳群である。桓仁には高句麗古墳群が 13 箇所ほどあり、大部分が積石塚である（桓仁滿族自治縣文物志編纂委員會 1990）。ただし、このうち米倉溝古墳群は壁画古墳をふくむ封土墳で、中期以降の古墳であるから、ここでは検討から外す（武家昌、梁志龍、王俊輝 2003）。

古墳の検討にあたっては、前期都城期の範囲は 3 世紀初めまでであるが、被葬者の没年も考慮してひとまず 3 世紀前半ころまでを検討範囲として関連資料をみたい。

さて、高句麗初期の古墳群として古くから知られている高麗墓子古墳群では、遺構と関連をもって出土した土器の報告が少ない。そこで、最近報告された同じ桓仁の望江楼古墳群出土の土器をあげ、下古城子土城と比較することにする（李新全 2012）。望江楼古墳群の墳丘は基壇をもたない方形または円形を呈する積石塚で、従来の高句麗積石塚古墳の変遷をたどった研究（李殿福 1988、李新全 2003、2012、東 2007）を参照すると、高句麗初期の積石塚の特徴を備える。

ここで、高句麗初期の都城を土器の年代から考えるために、高句麗土器編年に関する先行研究（魏 1985、耿林 1984、緒方泉 1985、東 1997、崔鍾澤 2003、2004、白井克也 2005）に学びながら、これまでみてきた五女山城、下古城子土城、そして望江楼古墳群の土器をまとめて、次のように桓仁地域における高句麗の土器編年を考えてみた。まず、相対編年として 3 期にわけると、1 期は、下古城子土城の土器で、基準資料は城壁下の土坑 HI の土器で、土器の特徴は、縦耳をもつ小型鉢をもつことにある（図 12）。ただし、土坑 HI の土器では小片なので、図には全形のわかる同じ城内からの採集品をもあげた。次に、2 期としたのは、五女山城 F47 の土器で、特徴的な器種としては縦耳をもつ小型甕（図 6-3, 4）と横耳をもつ鉢（図 6-7）があげられる。3 期としたのは、五女山城 J2 および J3 の土器で、横耳をもつ器形を含む（図 7-8、図 8-7, 8）。また、3 期には望江楼古墳群のうち、4 号墳と 5 号墳の土器（図 13 1~5）も含める。

四耳壺は、これまでの研究で、高句麗土器を最も特色付ける器種であることはよく知られている通りである。横方向の耳を四個つける器種は壺にかぎらず、鉢などにもみられ、時期の共通性をうかがう指標ともなる。ただし、四耳壺は、この桓仁地域の土器資料にみられるように、最初期には存在せず、比較ができない。これに対して、縦耳を持つ器形は、集安地域の積石塚の出土土器にも類例があり、年代を考えてみたい。

まず、1 期とした縦耳をもつ小型鉢は、万宝汀墓区 242 号墓、YM3241 号墓、M356 号墓（ただし、縦耳は 1 か所）などから出土している（孫仁杰 1993）。

からみて中期都城期以降に下がるものであろう。

古墳の構造は、いずれも墳丘が接続する、いわゆる「串墓」である。このうち、YM3241号墓は、方形の壇をなすが、階梯式にはなっていない。ほかのM356号墓、242号墓は、3～4段の階梯をなす。これらは、およそ3世紀代頃ととらえられている。少なくとも1期は、高句麗前期都城期に重なることだけは確認できたといえよう。土器以外では、先に紹介した、大型建築址J1からは、五銖銭と大泉五十銭がともに出土しており、報告書のいうように、紀元前後頃の遺物であって、前期都城期の遺構、遺物としてはこれが最も確かであろう。建築址J3の土器も横耳に限られるから同様の時期と思われる(図8)。2期、3期は、4世紀以降にくだるとおもわれ、とくにJ2の土器は、横の両耳をもつ大形鉢(図7-8)の存在からみて中期都城期以降に下がるものあろう。

なお、五女山城出土の鉄製武器。武具類の研究の成果をみると、武器、武具類の年代は、前期都城期に上がるものはほとんどなく、大部分が、後期都城期に下がるものであることが主張されており、上記の城壁年代の推定と齟齬しないことを付言しておこう(金 性泰 2007)。

第2節 集安地域の都城関係遺跡

本節では、集安地域の都城を構成する平地城と山城などを検討の中心とする(図1④)。ここでも検討の主眼を都城遺跡の年代におくことにする。検討の基礎となる遺跡の年代は前章で検討した瓦編年にもとづき、山城子山城、通溝城、ほかに都城関係遺跡として東台子遺跡にも言及する。なお、集安への遷都年代など文献史学的研究は、武田幸男、田中俊明の見解を参照した(武田 1989、田中 1995、2007)。

(1) 山城子山城

山城子山城は、通溝城の北西約3キロメートルに位置し、周長約7kmにおよぶ大規模な山城である。高句麗中期の平地の王宮(通溝城)とセットになり、逃げ城として存在したと理解されている。大戦前の踏査(池内 1940)の後、近年の大規模調査を経て、石築城壁、城門址(7か所)のほか、城内には、池址(1か所)、建物址(3か所)、古墳(38基)などの遺構があることが明らかにされた(図15)。

まず、山城子山城の年代的な位置づけをさぐるために、出土瓦の年代を検討した。山城子山城では、次の5か所の遺構から瓦が出土している。

宮殿址、瞭望台址、戍卒居住址、1号門址、2号門址

これらのうち、瓦当の出土している遺構は、「戍卒居住址」を除く4か所である(図15)。

瓦当の年代的検討により、これらはすべて、高句麗瓦編年7期に属することがわかる(図53)。

このことはあとでさらに言及するが、とくに本遺跡の理解で重視したいのは、2号門址と瓦の関係である。

門址と城壁の年代

2号門址は、石築城壁に開く門で、城壁開口部に一對の門礎石が残る(図16)。すなわち、出土瓦は門の建築に葺かれた瓦であることが確実である。この門の構造は、両側の城壁と一体に築造されていることが明らかであるから、出土瓦の年代は、この城壁自体の年代に直接かかわる重要な資料となる。すなわち、まず、2号門址および両側の石築城壁の年代が6世紀後半ごろを上限としてそれ以降、ということが出来る。つぎに1号門址からも同様に7期に属する瓦が出土した。1号門址自体は大きく破壊されており、門礎石はのこっておらず、2号門址とは違い、門の構造は不明で、城壁との関係を直接に把握することはできない。ただし、1号門址、2号門址とそれぞれの両側につらなる城壁は一連の城壁であるから、少なくとも、山城子山城での石築城壁、すくなくとも南面の城壁の築造年代が6世紀後半を

さかのぼらない、ということなる。

ここで、1号門址、2号門址をつらねる南面の城壁の築造型式に注目したい。城壁の立面図にあきらかなように、石の積み方は、城郭研究で「整層積み」と呼ばれる積み方である(図16、17)。

整層積みの城壁

「整層積み」は、高句麗の城郭に通有の城壁の積み方であることはよく知られている。「整層積み」は外見的には直方体の石を積んだように見えるが、楔形石と称されることもある石材の三角穂状に先の尖ったほうを内部におき、小口積みにしたもので、内部は典型的な例では、両端を細めた棒状の石材で満たすものである(松波宏隆 2010)。

このような積み方の年代については、研究史をたどると、高句麗初期の城郭の石積み、とする記述がある(李 殿福 1992、王 綿厚 2002 ほか)。こうした年代観の根拠とされているのは、その城郭の所在地が高句麗初期の都城の地にあることのほかに、具体的な根拠はあげられておらず、考古学的な手続きが希薄であったと言わざるを得ない。考古学的には、城壁の積み方の分類にもとづき、その変遷を考えるのが望ましいが、従来、積極的に果たされてこなかった。

そもそも石築城壁の築造年代を探るにあたって問題となるのは、後世の積み直しが常に想定されるということのほかに、出土遺物による年代推定が困難であるという点も指摘された(松波 2002)。すなわち、城内から出土した遺物がただちに当該城郭の築造年代に直結するわけではなく、また城壁内から遺物が出土すること自体が非常にまれである。城壁内の遺物は、築造の上限年代を示すことはあっても直接築造年代を示すわけではないからである。

こうしてみると、山城子山城で、出土瓦の年代を媒介にして石築城壁自体の年代が判明することの意義は小さくないと考える。

山城子山城全体では、南面城壁のほかに、東面および西面城壁も残りが良く、城壁の積み方は「整層積み」である。北面にも石築城壁が残る。破壊が著しく、表面の石材は崩落しているものの、内部には先を細くした長細い石材ががのぞいているから、本来整層積みであったことが推定できる。

したがって、山城子山城の石築城壁は、そのいずれもが整層積みであって、築造年代として6世紀後半ごろを上限とする、ということになる。

報告書で「宮殿址」と称する遺構は、礎石建ち瓦葺きの建物であり、瓦は高句麗瓦編年7期であり、中期都城期ではなく、後期都城期、それも後期平壤城の時期まで下る。したがって、中期都城の「宮殿址」とすることはできない。

なお、中期の山城子山城の状況については、上記のように不明とせざるを得ないが、山城内に分布する38基の古墳の状況は、これに関して手がかりを与える可能性があるので付記しておく。古墳の外形は、積石墓が30基、方壇積石墓が6基、封土墓が2基と報告されている。発掘調査された記録がなく、内部構造、副葬品等はほとんど情報がない。わずかに、やや規模の大きい石室封土墳は穹窿式天井をもち、5世紀始め頃とみられるという情報があり、出土遺物については、かつて、橋状横耳をもち泥質の黄釉陶が出土したという(李殿福 1982、吉林省考古研究室・集安縣博物館 1984)。山城内古墳の大多数を占める積石塚は、これに先立つ4世紀代を中心とするものであろう。

このように山城内古墳は、中期都城期と大きく重なる。古墳のみから判断はできないが、山城としてのあり方を考える上で重要な手がかりになるのではないか。すなわち、古墳の造営と山城の存続時期が重ならないとすれば、これまでのべてきたように、石築城壁や、門、礎石建物などの年代上限が6世紀後半頃となることとの関連で、4世紀から5世紀始めにかけての時期、山城子山城の状況がどのようなものであったかは、再検討をようすることになることを指摘しておきたい。

(2)通溝城

通溝城は、鴨緑江北岸の平地に位置するほぼ方形の城である。全体の方位は北で西に大きく振れ、鴨緑江とほぼ平行する。

近年の調査によると、城壁の各辺の長さは、北面城壁 730m、西面城壁 702m である。

城壁には、門および馬面(雉)とよばれる突出部の存在が確認されている。石築城壁は、西、北面に残るが、南面、東面は残りが悪い。

①王宮の位置の推定

平地の通溝城は、従来から高句麗中期の王宮が存在したと推定されてきた。通溝城に関する検討の第一の課題は王宮の位置の推定である。王宮の位置の推定にあたって、手掛かりの一つとして、出土瓦の分布状況をみたい。

その検討のために、これまで発掘された遺構、遺物の全体的な把握のために通溝城全体を9区に区分して検討する。区分は、西北から、A区、B区、、I区と名付ける(図22、註1)。

まず、高句麗にぞくする遺物として、瓦当の分布をみる。城内での中期の瓦は卷雲文瓦当であり、そのうち、『国内城』では卷雲文B類と卷雲文B'類を報告している。それぞれ、高句麗瓦編年の2期、3期にあたる。2期の瓦はE、F、H区から出土しており、3期の瓦はD、E、F区から出土した。瓦当の出土地が本来の使用地を大きく動いてないとするならば、この状況は、王宮建築の所在を推定する有力な手がかりになる。このほか、通溝城からは『国内城』の刊行以前に、瓦編年1期にぞくする「太寧四年」銘瓦当(卷雲文瓦A類)が出土している(李殿福 1980)。出土地は「浴池」で、地区区分でいえば、E区にぞくする。

以上の1,2,3期の瓦の分布状況をまとめると、E区を中心としてその東西のD区、F区、そしてE区の南のH区の4地区に集中している状況がうかがえた。

このように、瓦の分布状況から、このあたりが、城内の王宮建築が所在したところ、とひとまず推定しておく。

通溝城で、その後にくる瓦は、7期の瓦である。中期に卷雲文瓦に次いで用いられた4期の瓦は通溝城内からは全く知られていないことも注意しておきたい。

②門・城壁

通溝城で門、城壁と関連をもって出土した瓦は、北面城壁西門址、西面城壁門址の2か所である(表1)。いずれも7期の瓦である。先に見た山城子山城と同時期の瓦である。

②城壁の変遷

1984年の発掘で、はじめて城壁の断面が調査され、高句麗時代の石築城壁の内部に石築に先行する土築の城壁が存在することが明らかになった。この土築の城壁は、南面と北面のトレンチで確認されたものである(集安縣文物保管所 1984)。南面と北面の距離は約600メートルであるから、方形の土城に復元するならば、この距離は城壁の南北長をあらわすことになる。ここでは、南面城壁の断面図を掲げた(図21)。

この土城の年代および性格については、その報告以後、漢代の県城ではないかとする見解が一般的である(吉林省考古研究室・集安縣博物館 1984、賈士金 1988 李殿福 1992、魏存成 1994ほか)。年代の根拠とされたのは、城壁内から出土した遺物である(土器、石器)。環状石斧など青銅器時代の遺物を含む。遺物については城壁築造年代の上限を示すものではあっても、城壁の築造年代そのものを示すものではない。

なお、これまでの研究動向で、高句麗には土城をつくる伝統がなく、漢代の城をのちに高句麗が転用した、という理解が唱えられてきた(魏 1985)。田中俊明も、高句麗には方形の城をつくる伝統がない、とする(田中 2009)。

桓仁下古城子土城の検討で述べたように、これはそのままでは成り立たなくなったとい

えよう。

(3) 東台子遺跡

東台子遺跡は、通溝城の東約500mにあり、第二次大戦前から知られている遺跡である(大戦前の表記は東台子遺跡)。この遺跡の範囲は広大で、礎石が各所に露出し、大量の瓦が散布しており、当時の礎石配置図、出土瓦の写真などの報告がある(朝鮮総督府 1925、池内 1938)。通溝城、山城子山城に次いで、検討すべき都城関係遺跡である。

この遺跡は、1958年、はじめて発掘され、礎石建ちの建物跡が検出され、大量の瓦が出土した(吉林省博物館 1961、図 23)。

主要な遺構は、東西建物(東西約 21m、南北約 1m)で、内部は東西二室にわかれる。東室は礫敷きの壁で区切った閉鎖的な空間で、西室にはオンドルをそなえる。この建物の北辺西よりには北に延びる回廊の建物があり、その西にも別の建物がある。東西建物の東南にもL字形に屈曲する回廊の一部が付属する。

瓦当は、3種類出土し、量的には蓮花文が最も多く、ついで獣面文、忍冬文の順となる。この遺跡の瓦当文を山城子山城、通溝城での分類と比較すると、八弁の蓮花文瓦当(図 23-3)はCに類似するが、同範ではない。九弁(図 23-5)は該当するものがない。獣面文(図 23-6)はBaで共通する。忍冬文は文様が8単位のもの(図 24-1は仮Cと同一である。6単位のもの(図 23-4)は共通するものはない。このほか4単位の蓮花文で、弁間に珠文とY字状の装飾を配置したもの(図 23-2)があるが、山城子山城、通溝城にはない種類である。編年的には、7期にぞくしよう。

東台子遺跡出土の瓦当は、瓦編年の7期にあたることがわかる。なお、大戦前の採集瓦(朝鮮総督府 1925、池内 1938)には、上記以外の種類も知られているが、編年的にはすべて7期に収まることを付言しておく。

さて、この遺跡の性格について、方起東は、遺構の特殊性に注目し、東室を中央に立柱をおいた閉鎖的な空間とみて、『三国史記』392年条にみえる「国社」にあてた(方 1982)。この説は、多くの概説書や、概説的記述に取り入れられており、通説化しているが、文献史料による遺跡解釈の点から姜賢淑による反論もある(姜 2010)。

以上のように、筆者の編年によると出土瓦は、瓦編年7期、すなわち、6世紀後半以降とみるべきであって、方の説は、検討を要することになる。なお、392年の瓦といえ、瓦編年4期、すなわち輻線蓮花文1類の瓦である。

以上のように、瓦からみると、山城子山城では、城門や、城内建物の年代が瓦編年の7期、すなわち後期平壤城(長安城)の時期まで降る。とりわけ、城門と一連の城壁の年代も同様に考えられることになる。山城子山城の城壁は、整層積の城壁である。通溝城の城壁も基本的にこの積み方であり、この積み方の城壁の年代の一点が考古学的に判明することは重要である。というのは、従来、銘文城石などによるほかなかつた石築城壁の年代推定に大きな手掛かりになるからである。山城子山城における城門関係の建築に葺かれた瓦の年代により、整層積みの石築城壁の年代の一点が直接におさえられることになる。

<集安でのその他の遺跡>

一方、集安ではこのほか梨樹園子南遺跡など多量の瓦を出す遺跡がある。梨樹園子南遺跡では出土瓦は、7期、すなわち6世紀中頃以降のものが主体をしめており、平壤遷都(427年)後に、瓦を用いた建物の造営が広範囲にみられることが注目される。

集安は、平壤遷都後、おそらく5世紀後半以降にも、高句麗の三京(平壤城、国内城、漢城)の一つとして重視されており(『隋書』高麗伝)、都城研究の上からも集安地域の遺跡変遷は注目されよう。

第3節 平壤地域の都城関係遺跡

個々の遺跡の具体的な検討に入る前に、平壤における高句麗都城に関する調査研究史

の概略をみておきたい。

(1) 平壤における高句麗都城の調査研究略史

<第二次大戦前>

まず、関野 貞の調査研究を取り上げる。

大戦前に、平壤地域における高句麗都城研究をリードしたのは関野貞である。関野の研究は実地の遺跡に基づくものであったが、遺跡の検討の基礎になる文献史料の理解に関しても従来の混乱をただし、以後の研究を軌道にのせた点でも大きな意義をもつ。

すなわち、長寿王は 427 年に集安から平壤に遷都するが、その初期の遺跡(平壤城)を、それまでの史家が、平壤市街の地と考えたのに対して、関野は、平原王代(586 年)築造の長安城とみなし、長寿王代の王宮を、平壤の東北郊外の「安鶴宮」という地名の残る地に比定した。この「安鶴宮」は、それまで、平原王代の平壤城(長安城)と考えられてきたところであった(『新增東國輿地勝覽』)から、関野の研究は従来の考えを逆転させるものとなった。すなわち、前期平壤城王宮を安鶴宮、後期平壤城(長安城)を平壤市街地の平壤城とみなしたことになる。

もっとも関野のこの考えは、のちに安鶴宮の瓦に関する認識の深まりと、あらたに清岩里土城の発見により修正され、前期平壤城の王宮は、清岩里土城とする考えに修正され、安鶴宮は、高句麗末期の別宮という位置づけに変わる。したがって、関野の説は、それまでの説と以後の説とに分ける必要があり、ここでは、「関野旧説」、「関野新説」として区別しておく(関野旧説:1914(大正 3)「満州輯安縣及び平壤附近に於ける高句麗時代の遺跡(二)」『考古学雑誌』5-3、関野新説:1928 年「高句麗平壤城及び長安城に就いて」『史学雑誌』39-1)。

大戦前において特筆すべきは、関野の没(1935 年)以後、関野が前期平壤城王宮に比定した清岩里土城がはじめて発掘されたことである。すなわち、かつて関野は、土城内に三箇所の瓦散布地を確認し、そのうち東よりのいちばん広い台地を王宮と推定した。この台地が発掘された結果、一塔三金堂からなる寺院址の遺構が発掘されたことにより、関野の推定に対しては、否定的な結果となる(小泉 1940)。しかし、前期平壤城の王宮比定にかんする問題は、大戦前にはこれ以上の進展をみることはなかった。

<第二次大戦後>

大戦後、平壤の地の調査は、北朝鮮の手に移る。北朝鮮では、植民地時代の高句麗遺跡の調査に関して全般的な見直しがおこなわれるなかで、高句麗都城に関しても注目されるのは前期平壤城王宮として、安鶴宮をあてる見解がうちだされたことである。た。安鶴宮遺跡は、大戦後、大城山城などとともに、大規模な発掘がおこなわれ、大規模な建物遺構群が姿を現したが、この見解は、発掘前になされたもので、遺跡の発掘後もこの主張はかわることなく北朝鮮には定説の位置を占める。

この見解に対する北朝鮮以外の研究者の見解について、とくに安鶴宮遺跡の年代的位置づけに対する見解を整理すると①そのまま踏襲するもの、②高句麗末期とするもの、③高麗時代の遺跡とするものなど、大きく 3 種の見解が併存しており、近年では高句麗時代説、高麗時代説両論併記とする記述も目につく。

次に、安鶴宮遺跡以外の高句麗都城関係遺跡について触れる。

まず、清岩里土城に関しては、1990 年代以降、小規模な発掘があり、城内における建物跡、城壁の調査などが行われている。特に城壁の断面がはじめて調査され、土城の変遷に関する情報をもたらした意義は大きい。

大城山城は、大戦後、北朝鮮により始めて発掘された。南門と、石築城壁のほかに、城内の多数の池跡などが調査され、南門からは多数の型式の瓦が出土した。

後期平壤城(長安城)に関する調査をみる。総合的な書物として『高句麗平壤城』をあげる。本書は、第二次大戦後に調査された石築城壁の立面図や、断面図などの多数の実測図を公表し、長安城にかんする初めてのまとまった研究書となっている。

最後に都城と関連をもつ高句麗寺院址の調査研究の動向にふれておく。

高句麗寺院址は、平壤地域では、大戦前に清岩里廢寺および上五里廢寺、平壤の 24 km 西北の元五里廢寺（旧平安南道德山郡）、の 3 箇所が発掘された。大戦後の発掘例では、平壤から 20km 南で定陵寺（平壤特別市戊辰里）、黄海北道の土城里廢寺（鳳山郡）の 2 箇所が新たに加わる。これらの寺院址についても情報が整理された（田村晃一 1988、千田 1993、田中俊明 1995）。都城との関連での寺院址の位置づけにたいする研究は進んでいない。

(2) 安鶴宮遺跡

ここでは、近年の調査研究動向を加えて、安鶴宮遺跡に関する調査、研究史を整理するとともに、高句麗都城研究における本遺跡の位置づけを考えたい。

① 安鶴宮遺跡の概要

安鶴宮遺跡は平壤市街地の東北郊外、高句麗時代の王都を守る山城である大城山城の南麓に位置する。一辺約 600 メートルの略方形の土塁をめぐらした遺跡であって、その存在は古くから知られており、朝鮮時代の記録にみえる。

高句麗の王都に関する文献史料には、王は普段、平地の王宮に住まいするが、いったん急がせまれば、山城に退避すると、いう記事からイメージされる王宮と山城の関係に、この遺跡の立地はいかにもふさわしい。というのは、高句麗中期（3 世紀初～427 年）の都城がおかれた集安の通溝城と山城子山城にみられる平地の王宮、山城の関係を継承する、とみられてきたからである。

ここでとりあげる安鶴宮遺跡の年代的な位置づけには現在、大きく、高句麗時代説と、高麗時代説の 2 説に大別できる。筆者は現在、高麗時代説をとるが、依然として高句麗時代説も根強い。

このように、遺跡の年代観に最大、数百年もの差があるのは奇異である。

以上のような見解の差は、遺跡と遺物の理解に大きな相違があることに起因すると思われる。

以下では、調査研究史をたどりながら、遺跡の年代、性格にかんする検討に進みたい。

② 安鶴宮遺跡の調査研究略史

第二次大戦以前—未発掘、踏査のみ—

安鶴宮は地名である。朝鮮時代の地誌『新增東國輿地勝覽』（1481 年撰）の平壤府の項に次のように見える。

長安城

在大城山東北。土築。周五千一百六十一尺。高十九尺。

高句麗平原王二十八年。自平壤移居于此。城中有安鶴宮古址。

すなわち、15 世紀代には安鶴宮遺跡を、後期平壤城、と見なしていたことになる。

安鶴宮遺跡が地図に載せられたのは、1915 年の朝鮮総督府『朝鮮古蹟圖譜 一』の付図に「平壤附近樂浪郡及高句麗遺蹟圖」（五萬分の一）と題する地形図に、「傳安鶴宮址」として、図示されたのが早い例であろう。また、同時に刊行された『朝鮮古蹟圖譜 二』には、安鶴宮遺跡の写真と瓦（軒丸瓦 3 点、軒平瓦 4 点）が掲げられている。遺跡にかんする解説（関野執筆）の全文を引用する。

「傳安鶴宮址[三八四一四〇二]

平壤の東北約三里、大同郡林原面大城山下なる安鶴宮と稱せらるゝ處にあり(地圖一参照)方約五六町繞らすに土城を以てす。傳へて高句麗の安鶴宮の遺址と稱し、又長安城の故地とも云ふ。土城内より高句麗時代の者と認むべき巴瓦及び唐草瓦を多く發見せり。其地形より判ずるに、或いは長壽王の遷都せし平壤城の址にはあらざるか。猶後考を俟つ。」

つづいて、1928年、関野は、文献史料、遺跡、遺物を総合的に検討して、平壤地域における高句麗都城遺跡の理解を詳細に示した(関野 1928)。

この翌年、1929年、関野は、朝鮮総督府『高句麗時代之遺蹟』図版上册(古蹟調査特別報告第七冊)、を編み、遺跡の細部写真と地図、瓦を紹介した。瓦は、軒丸瓦11点、軒平瓦8点と、増加している。地図では「大城山城址及安鶴宮址及古墳分布圖」「平安南道大同郡林原面四足里安鶴宮址」の2葉が安鶴宮遺跡とその周辺を詳細に図示する。ただ、本書の解説は未刊に終わっている。

関野は1935年に亡くなったので、上記の1928年の論文が関野の見解として最新かつ最終的なものとなった。遺跡と遺物の関連で関野の見解の進展を整理するならば、はじめ、安鶴宮の内部に高句麗瓦が散布していることにより、高句麗時代の王宮、すなわち、前期平壤城とみなしたけれども後に深められた自身の高句麗瓦の年代観にもとづき、遺跡は高句麗末期の別宮という見解に変わった。つまり、前期平壤城とはみなさなくなった。一方、安鶴宮の位置づけの変化にともなって、前期平壤城の王宮を別個にさがすことになり、その結果、あらたに確認された清岩里土城が前期平壤城とみなされることになったのである。

第二次大戦以後一発掘調査の実施一

安鶴宮遺跡に発掘の鋏が入ったのは朝鮮総督府による支配から解放された1945年以後のことである。北朝鮮による最初の発掘は1958年に始まり、1961年にかけて行われ、1964年に報告された。この時点で、始めて土城内で建築遺構が姿を現し、また瓦も多量に出土した。その後、1970年代にも大規模な調査が実施され、1973年に報告された。この調査では、さらに多数の建築遺構が検出され、報告された瓦は、軒丸瓦15種、軒平瓦10種に及ぶ(図26~28)。

これらの調査により、土城内には、回廊でかこまれた広場をもつ宮殿風の大規模な建築遺構群の存在が確認され、また遺構に伴う瓦も大量に出土し、発掘前の採集品と比較すると、瓦の種類は大幅に増えた。採集資料に拠らざるを得なかったこれまでに対して、はじめて遺構と結びついた形での議論が可能になったことの意義は大きい。北朝鮮は、これらの調査報告書において安鶴宮遺跡を前期平壤城の王宮とする(蔡熙國 1964、金日成総合大学考古学・民俗学講座 1973)。当然ながら、瓦の年代観についても前期平壤城の時期とみている。安鶴宮遺跡を前期平壤城の王宮とみる見解は、北朝鮮では、定説とされ、今日にいたる(ソン・ジェホン 1985)。また、日本では、安鶴宮遺跡の発掘成果は、高句麗時代の貴重な遺跡の調査として紹介され(永島 1982)、その後、日本では、この遺跡は前期平壤城に属する遺跡として紹介されることが多いけれども、高句麗末期説によって記述するものもある(早乙女雅博 2000)。

なお、2006年には、北朝鮮と韓国との共同調査もおこなわれている。その報告書では、安鶴宮を前期平壤城の王宮とみる見解に変更はない(東北亜歴史財團 2006)。

③ 安鶴宮遺跡における古墳と遺跡の年代に関する疑問

安鶴宮遺跡の発掘では、3期の古墳の基底部が発掘された(安鶴宮1~3号墳)。この遺跡において建築遺構と古墳との共存がありえない以上、これらの古墳は、建築遺構より古いか、または新しいかのいずれかでなければならない。これらは発掘調査の所見では、安鶴

宮の建設に際して破壊されたものという。したがって、この所見に従うかぎりこれらの古墳は平壤遷都時、すなわち 427 年以前のものであるはずである。実態はどうであろうか。いまこの古墳のうち、1 基は両袖式の横穴式石室（安鶴宮 2 号墳）、あと 2 基は、片袖式の横穴式石室である（同 1, 3 号墳）。石室構造からみると、前者は、5 世紀代に遡る可能性もあろう。しかし、片袖式の後者については、6, 7 世紀代を中心とするものとみるのが妥当であって、5 世紀代前半、427 年以前に遡るとは到底考えられない（ソン・ジェホン 1985）。

この点からだけでも前期平壤城とされる安鶴宮の造営年代に重大な疑問が生じるさらに、出土瓦の年代推定は、この疑問をさらに大きくする。

報告書の安鶴宮年代論の根拠のもうひとつの中心は出土瓦の年代観にあるから、次に出土瓦に対する検討をこころみよう。

筆者は、安鶴宮遺跡の瓦を検討する中で、報告書の示す年代観に疑問をもち、はじめは高句麗末期と理解した（千田 1983）。その後、高句麗時代ではなく、高麗時代にくだるのではないか、という見解に変わっている（千田 1994、2005）。この間に、集安地域と平壤地域をふくむ高句麗時代の瓦編年案については公表しており（千田 1993）、これまでの検討をもとにあらためて概要を述べておく。

安鶴宮の瓦を考えるうえでの重要な基準のひとつは、高麗（935～1392 年）の都であった開城の満月台遺跡である。高麗の首都は、江華島に移った時期（1232～1270）をはさんで、開城にあり、王宮の所在地が満月台遺跡である。満月台遺跡の瓦については、1918 年、朝鮮総督府発行の『朝鮮古蹟圖譜 六』に掲載されている資料を検討した（図 30・31）。

満月台遺跡の瓦は、採集資料であるので、文献史料にみえる多数の宮殿名との対比などは、おこなえない。近年、北朝鮮により、また南北共同の試掘調査が実施されつあり、今後、より良好な資料の出現が期待される。しかし、そうした調査の結果は、まだまとまった形では報告されていないので、ここでは、この資料による検討をおこなう。

満月台遺跡の瓦について軒丸瓦、軒平瓦を総体としてみると、大きく、2 種類に分けることができる。これを仮に A 類、B 類とする。

先に、B 類について述べる。軒丸瓦 B 類（図 30-23～28）は、蛇の目文、暉目文などと呼ばれる文様で、中央に、半球形の中房をおき、その周囲に同心円状の隆起線をめぐらす。軒平瓦 B 類（図 31-15～21）については、軒丸瓦と同様の半球形の文様を 2 個配列する。次に A 類（図 30-1～22）の軒丸瓦は、B 類とした以外の、蓮花文などを一括する。軒平瓦 A 類（図 31-1～14）は、B 類以外の唐草文などを一括する。B 類は、軒丸瓦 6 点に対して、軒平瓦は、7 点が図示されている。軒丸瓦、軒平瓦は、ほぼ同数であるので、複数のセットとして屋根に葺かれたものと理解して大過ないであろう。一方、A 類は、軒丸瓦 22 点、軒平瓦 14 点が図示されており、これも不完全ながら全体としては、本来いくつかのセット関係にあったものであろう。

さて、このような瓦の年代はどうみるか。まず、A 類は、高麗時代にさきだつ統一新羅時代の文様を継承したものと理解でき、総体として、B 類に先立つものとひとまず理解できよう。つぎの問題は、B 類の出現年代であり、これを厳密に決めることが、安鶴宮の瓦の年代を考える上でも最重要の課題である。いま、厳密な年代を出せる段階にはないが、朴銀卿氏の研究によると高麗の中期、およそ 12 世紀から 13 世紀にかけて出現したのではないかと推定される（朴 1988）。

ここで、安鶴宮の瓦にもどると、安鶴遺跡からは、軒丸瓦 16 種類、軒平瓦 10 種類が出土しており、軒丸瓦、軒平瓦はセット関係をなしていたことが推定できる。満月台遺跡との比較では、B 類がまったく出ていないことがまず注目される（図 27・28、表 3）。

安鶴宮の軒丸瓦は、文様要素を個別にみると、高句麗瓦と類似する点がある。とくに、半球形の中房や、立体的な蓮蕾の表現などがあげられる。こうした点が従来、安鶴宮の瓦を高句麗時代とみてきた理由の一つでもあったと推測できる。安鶴宮の瓦は、異論のない

ほかの高句麗瓦と比較すると、まず、瓦当を分割する放射線（幅線）が皆無であることや、弁と弁の間の装飾、周縁の珠文の存在など、多くの相違点がある。こういう瓦が前期平壤城期であることはあり得ず、また、後期平壤城期におさまることも考えられない。多くの特徴は、統一新羅時代以後に現れる特徴であり、これが逆転することは考えられない。こうした瓦の検討に際して軒平瓦の存在することは重要である。安鶴宮遺跡では、報告された軒丸瓦・軒平瓦はセットをなすと理解して問題ないであろう。この点は、以後の考察の分岐点であり、この点の確認は重要である。というのは、近年の論調には、安鶴宮の軒丸瓦だけをとりあげ、高句麗時代とする見解（白種伍 2006）もあるからである。発掘調査によって遺構と関連をもって出土した瓦のセットの一方を切り捨てて、軒丸瓦のみをとりあげ、高句麗時代とするのは、資料操作の手続きからみて首肯できない。

さて、安鶴宮の瓦が満月台遺跡 B 類よりさがることはまずないといえることができるが、A 類との関係はどうか。筆者は、安鶴宮の軒丸瓦は、大きくは、A 類に対比できる資料とみている。満月台の瓦に類似の文様が見あたらないのは、安鶴宮の瓦が平壤地域の特色を濃厚に有しているためと理解している。平壤地域では、安鶴宮遺跡以外では、満月台遺跡の B 類にあたる瓦が分布していることも、安鶴宮の瓦が B 類に先立つものであることをうがわせる。すなわち、B 類が朝鮮半島にひろく分布する、いわば広域様式とでもいうべき文様をもつ瓦であるのに対して、安鶴宮の瓦は平壤地域に限定される強い地域色をもった瓦であることを示唆しており、元五里廢寺出土軒平瓦と同範かと思われるものが出土している（図 45-7）。

以上のように、安鶴宮遺跡の瓦の年代は、B 類の出現以前、すなわち、11～12 世紀ごろを下限とする、とみることができよう。一方、上限については直接の資料はないが、軒丸瓦、軒平瓦とも文様の整ったもの、崩れたものの両者があることから、若干の年代幅の存在が推測できよう。一部 10 世紀代にさかのぼる可能性もあろう。

このように、安鶴宮遺跡の瓦に若干の年代幅を想定できるとすれば、安鶴宮の発掘遺構に、建物方位に大別 2 種類あること（千田 1983）一部建て替えのみとめられる部分があることなどにより、遺跡が短期間ではなく、ある程度の存続期間が想定できることと符合する。

④ 近年紹介された安鶴宮遺跡採集資料をめぐって

以上のような発掘報告書による検討とは別に、報告書刊行以後、安鶴宮遺跡に関わる瓦資料が紹介されているので、言及しておく。まず、『朝鮮遺跡遺物図鑑 3』（1989）に紹介された資料である。この『図鑑』には、安鶴宮遺跡の瓦として、上記 2 冊の報告書にはみえない、型式の軒丸瓦 2 点が紹介されている。次に、東京国立博物館の蔵品で、安鶴宮出土とされる瓦である（谷 豊信 2005）。これにもやはり、上記報告書には見えない型式の瓦 2 点が含まれている。これらの瓦は、いずれも従来から高句麗瓦とみなしてきたものであって、筆者もそのことには異論はない。問題は、こうした瓦と安鶴宮遺跡との関連である。後者が採集資料であることは明らかであるが、前者については、発掘調査によって、建築遺構と関連をもって出土した資料であれば、安鶴宮遺跡の年代論に関わることになるからである。しかし、1973 年以後、『図鑑』刊行の 1989 年まであいだに、安鶴宮遺跡に対する発掘調査がおこなわれたという情報を確認することができず、現時点では採集資料と理解しておく。

⑤ 安鶴宮遺跡の年代

以上みてきたように、出土瓦の年代は、高麗時代とみる。発掘調査で大規模な建築遺跡に伴って、瓦が出土したことが報告されているわけであるから瓦の年代から遺跡の年代を考えることは妥当な手続きである。

以上の考古学的な検討によって、安鶴宮遺跡は、前期平壤城（427～586）の時期ではなく、また高句麗末期、とする説も成り立たない、と考える。すなわち、高麗時代の遺跡である、

と結論せざるをえない。

5 まとめ

以上のように、安鶴宮遺跡は高句麗時代ではなく、高麗時代とみるのが妥当と考える。そうすると、必然的に遺跡の位置づけとして高句麗都城史からは外れることになる。

ここで、注目されるのは、文献史学の成果である。田中俊明は筆者の安鶴宮遺跡出土瓦高麗時代説を前提としたうえで、史料を検討された結果、安鶴宮遺跡を『高麗史』文宗 35 年(1081 年)条にみえる「左宮」にあたるという説を提出されている(田中 2004)。よるべき説であろう。

安鶴宮遺跡は、以上のように、解放後の発掘報告の頭初段階からみると、年代観が大きく変わらざるをえない。とりわけ遺跡・遺物を中心にした高句麗都城の研究は新たな出発が求められているといえよう。

(2) 清岩里土城

1 はじめに

清岩里土城は、平壤市街地の東北郊外、大同江の北岸にある(図 24・32)。清岩里土城は、山城である大城山城とともに、前期平壤城を構成する重要な平地城であり、以下に述べるように王宮が存在したと考えるが、なお未解明の点が少なくない。

ここでは、近年の発掘調査の成果をふまえ、主として考古学的資料に即して前期平壤城としての清岩里土城を考えてみたい。

なお、清岩里土城は、地名の改定により現在は、清岩洞土城とよばれているが、便宜上、清岩里土城の旧称を使用する。

3 清岩里土城に関する調査研究の成果

第二次大戦後、清岩里土城にかんしては、土木工事にともなう遺物の発見以外には、ほとんど情報がなかったが、近年、土城にかかわる発掘調査を実施し、城壁の構造を明らかにしたほか、土城内の建築址の発掘などの成果を報告している。ここでは、まず、こうした近年の調査成果を含め、城壁や城内の建築址、出土遺物など、清岩里土城に焦点をあてて情報を整理したい。

まず、第二次大戦前、の調査研究をとりあげ、ついで第二次大戦後の北朝鮮による調査研究の成果を図面を中心に具体的にたどってみる。

(1) 第二次大戦前の調査研究

平面図

清岩里土城の平面実測図は、1929 年刊行の『高句麗時代之遺蹟 上冊』が最初であって、5 千分の 1 の地形図に土城の城壁、門址、礎石所在地を表現している(以下、これを「1929 年の図」と略記)。ここに掲げた地図(図 23 上)は、清岩里土城にたいする初めての発掘となった 1938 年の調査の報告書の図(1940 年刊行、註 13、以下、「1940 年の図」と略記)で、基本的に 1929 年の図をベースに作成されたものである。ここでは、総督府時代の調査成果をこの 1940 年の図によってみておきたい(図 32)。

城壁・門址・礎石

これによると土城全体の形は、大同江に面して半月形をなす。東西約 2km、南北約 600m の規模で、城壁は、西辺から北辺にかけてと、東辺南部に認められ、南辺にはまったく確認していない。城門址は「西門址」「北門址」「東門址」の 3 か所を表示する。そのほかでは、土城内に 3 か所、および「東門址」を出たすぐのところ 2 か所、合計 5 か所に礎石の

所在を黒丸で示す。ここまでは、1929年の図と内容は同一である。

瓦散布地域・寺院址発掘

1940年の図では、発掘した「清岩里廢寺」の遺構図を図示するとともに、新たに「古瓦散布地域」として4か所をドットで示す(図33上、A~Dを付した4箇所の円の範囲)。1929年の図の備考欄には、「城址内ニハ高句麗時代及高麗時代ノ瓦片散在ス」とあり、これを視覚化したことになる。清岩里廢寺の場所は、このうちCにあたり、かつて関野が王宮に推定した場所である。

採集瓦集成

第二次大戦前には、このような調査のほかにも、採集瓦の集成がある。1929年発行の『高句麗時代之遺蹟 上册』には、清岩里土城にかかるとみられる多数の採集瓦を収録する。採集地の情報として、「清岩里」など地名を付している瓦は、清岩里土城にかかわる瓦であろう。

(2) 第二次大戦後の調査研究

第二次大戦後は、北朝鮮による調査によって上記の成果に新たな情報を付け加わる。

その主なものをあげると、まず、1958年、土城付近から、土木工事中に金銅製の透かし彫り金具などの発見がある。詳細な出土状況が不明確で、土城との関わりは不詳である。

次に、1998年以降に公表された土城自体にかかわる発掘の報告によって、城壁構造、土城内の建物址、などを記述する。

1) 土城の規模

土城の規模については、詳細な数値の記述があり、周長約3450m、北城壁(北門~東門)が約700m、東城壁(東門~酒岩山)が約600m、西城壁(北門~西門)が約650m、南城壁が約1500mとする。なお、この南城壁とは、実際には城壁そのものは無く、いわば城郭としての南辺のラインを示すものであろう

2) 城壁の規模・構造・変遷

城壁自体の規模は、元来の様相を比較よく残す北門付近での状況の記述がある。ここでは城壁の内側での高さ約2.5m、外面の高さ約5m、上部の幅1m程度、基底部の幅が約17mである。

城壁の調査では、城壁の構造、変遷にかかわる重要な知見を報告した。城壁断面の調査は、北門址の西側で実施し、報告では、城壁は、下層城壁と上層城壁に分かれ、上層は高句麗時代であるが、下層は、古朝鮮時代にさかのぼるとする。図との対比でいえば、「下層城壁」は、「土城(赤土)」が該当しよう(図34)。そして、「上層城壁」は、高句麗時代には3度にわたって「増築」したとし、各時期、それぞれ城壁築造材料が異なるとする。この「増築」は、古い順から「土石混築」、「小石+赤土」、「石+赤土」、の各層に該当しよう。

3) 土城内の建築址

土城内西よりで建築址を発掘した。「西部地域建築址」がそれで、礎石は失われているが、礎石下の基礎施設や、縁石により、長さ50m、幅20mの規模の東向きの建物に復元できるとし、高句麗時代の建築址と述べる(図33)。

4) 出土瓦とその年代

1998年以降の報告では、土城の城壁と、この「西部地域建築址」にかかわる出土瓦をあげた。城壁や、この建築の年代にかかわる重要な資料となるので、見ておこう。

軒丸瓦は全部で8種類掲げる(図33-1~8)。出土状態には、西部地域建築址に関するものと、土城壁にかかわるものがあり、また、報告の記述では、「発掘」「発見」「収集」を区別している。

1~4は、「西部地域建築址」から「発掘」したもの、5は、「西部地域建築址周辺」および「土城壁」から「発見」したものである。6は、「土城内」から「発見」したもので、7・8は、「土城内」から「収集」したものである。瓦の年代について報告では、1~3、5~7が高句麗時代、4が高麗時代、8が高句麗末~渤海とする。

4 清岩里土城内の建築と城壁の年代

1 「西部地域建築址」の年代

「西部地域建築址」の瓦について検討しよう。「西部地域建築址」から「発掘」した瓦について報告では、1～3が高句麗時代(1:5世紀末～6世紀、2:5世紀末以降、3:6世紀中葉～6世紀末頃)、4が高麗時代とする。4については、異論がないが、1～3については、安鶴宮遺跡の発掘で類例が知られていて、高麗時代に降る瓦とみるべきである。

結局、「西部地域建築址」から「発掘」した瓦は、先述したようにすべて高麗時代に属するから、「西部地域建築址」の年代も高麗時代であることになる。5は、「西部地域建築址周辺」からの「発見」とあって、瓦の年代は、「4世紀末」とするが、筆者の平壤地域高句麗瓦編年では、2期にあたり、5世紀半ばから6世紀前半ごろの瓦とみる。この瓦はその出土状況が「西部建築址周辺」「発見」であって、「西部地域建築址」「発掘」の瓦とは明確に区別されていることからこの瓦の年代と「西部地域建築址」の年代は直接結びつかないとすべきであろう。

この高麗時代の遺構を考える際に、ただちに想起するのは、土城内からかつて発掘された高句麗時代の寺院址(清岩里廃寺)である。この寺院址には、重複して高麗時代の遺構が検出されている(小泉1940)。大きく見れば、この「西部地域建築址」も、この高麗時代の寺院との関係で理解されるべき遺構であろう。

2 城壁の築造年代

清岩里土城という際に、城壁のみをさす狭義の場合と、城壁と城壁でかこまれた範囲をさす広義の用法がありうる。ここでは、城壁自体の築造年代を考える。

上にみたように、近年の発掘によって、城壁構造が明らかになり、土城の変遷については、初築が古朝鮮時代にさかのぼるとしている。その根拠は、出土遺物による。北門付近と、城内の発掘、試掘過程で、青銅器時代から古朝鮮時代の遺物がでていて、城壁のうち、下層城壁からは高句麗時代の遺物がでないが、上層城壁からは、赤色の高句麗瓦が出土することなどをあげている。

しかし、城壁から高句麗時代の遺物が出土しないことは、その城壁の築造が高句麗時代以前とする根拠にはならない、と考える。

城壁の年代に関わる資料としては瓦がある(図33-5)。これは城壁から発見された瓦であり、いまのところ城壁に直接関わる瓦としては唯一の資料である。出土状況は、報告によると、城壁断面との対応で言えば、「上層城壁」すなわち、「土城(赤土)」より上層の3層のうちのいずれかの層からであろう。この瓦は、報告では、4世紀末とするが、筆者の瓦編年では2期、すなわち5世紀後半から6世紀前半ごろの瓦である。この瓦からは、城壁の初築年代が2期以前であることが推測できる。なお、土城内から発見、あるいは収集された瓦(図33-6～8)は瓦編年の第3期、すなわち6世紀後半以降の瓦である。

現時点では築造年代が高句麗時代よりさかのぼるとする確実な考古学的資料は無いとすべきであろう。

5 前期平壤城王宮の所在地と清岩里土城の年代―

以上のような考古学的資料をふまえて、王宮の所在地、および清岩里土城の変遷、の二点について述べておきたい。

王宮の所在地

王宮の位置の推定に関して述べる。筆者は、かつて、土城内のほぼ中央部を占めるBとCの間の空間を、王宮の候補地として注目した(千田2000)。BとCの間には、瓦が散布しな

いから、この空間に王宮を想定するならば、その建築は瓦葺き以外の構造とみるようになることも指摘した。上述のように、Bの瓦が明らかになり、高麗時代の建築にともなうことが判明した以上、筆者の王宮の位置の推定はその可能性を増したと言えよう。ここで先には記述を省略した瓦散布地AおよびDについて触れ、この問題をさらに深めたい。

まず、もっとも西のAは、その分布状態からみて西門址の瓦であることほぼ間違いないであろう。またもっとも東のDは、東から南西に鋭角をなして屈曲する城壁の内側に接して分布する。このような狭い場所に王宮を想定するのはほとんど無理であろう。したがって、城内の瓦散布地域4か所は、以上の検討により、いずれも王宮の候補地から外れることになる。このことは王宮の姿を考える際に重要である。

くりかえすが、王宮をこの場所に推定するならば、そこには瓦の分布が知られていない場所であるので、王宮建築は瓦葺きではなかったことになろう。このことは、高句麗王宮の景観を考える際に重要な問題を提起しよう。

清岩里土城の年代

清岩里土城築造の年代を考える際、とりわけ重要な門の瓦が不明であることは、大きな制約である。ただし、大城山城との関係で清岩里土城の年代の一端を推測できることは見逃せない。というのは、かつて関野貞は、大城山城の表門と清岩里土城の表門（図33の東門址）との有機的な関係を指摘した（関野 1928）逃げ城としての大城山城と平地の王宮としての清岩里土城をセットとして、中期の都城である集安の山城子山城と通溝城との関係とも合致するとみたのは妥当である。この大城山城の出土瓦は、427年の平壤遷都を上限とすることができる。

清岩里土城にかかわる高句麗時代の瓦としては発掘調査による資料はこれまで清岩里廃寺の瓦に限られていた。これに近年の資料が加わったことはこれまで記述してきたとおりである。ところで、大城山城の瓦は、瓦編年の4期、すなわち5世紀前半にあたり、清岩里廃寺は5期からはじまる。特に城壁発見の瓦は、「上層城壁」からの発見と推測でき、城壁の修築時に混入した瓦と理解できる。この瓦も5期に属する。

したがって、確実に清岩里土城との関連で出土している瓦は、5期に始まることがわかる。以上のように、清岩里土城の城壁修築および廃寺の年代の一点が瓦編年5期、すなわち5世紀後半から6世紀後半にあることが判明したことは重要である。過去の清岩里の採集瓦のなかには、第1期にあがるものもあるから、清岩里土城の初築が大城山城の築造年代にまで上がることは十分ありうるといえよう。

6 おわりに 清岩里土城の位置づけ

以上のように、第二次大戦後の調査成果は、清岩里土城の性格の解明に貴重な資料を提供することになった。

前期平壤城の王宮の所在地を清岩里土城内に推定する考えの最終的な当否は、将来の発掘調査によって検証されようが、現時点で、公表された資料により考察を重ねておくことは意義があろう。

また、建築が瓦葺きであるか否かは、王宮の景観を復元するうえでも大きな問題となる。さらにまた、同じ土城内に王宮と寺院が併存することは、前期平壤城の特質にあげることができる。

(4) 大城山城

大城山城は平壤市街地の東北方約7kmにある。中に大きな谷ををかかえ、6つの峰をとりかこんで、城郭ラインの総長7kmにおよぶ山城である。西南にひらく大きな谷部分は、二重に作られ門がひらく（報告書では南門）、その北の谷には三重の城壁をなす。門址は全部で19箇所あるという（図25）。

瓦は南門址から出土した。門址という報告であるが、示された実測図によると城壁から方形に突出した石築であり、むしろ「敵台」とよぶべきではないかという指摘がある（田中

1995)。いずれにしても、瓦葺きの木造建築の存在をしめすものである。軒丸瓦 21 種が報告されている(図 35・36)。瓦編年からみると 4 期から 7 期にわたる長期間の瓦が存在する。4 期は 1 種だけ(図 35-2)で、それ以外は 5、6、7 期に属する。瓦の数量的な記述がないので、推測にとどまるが、5 期の瓦の種類が多い。瓦葺きの主体は 5 期にあり、6、7 期の瓦は、のちの修復時の瓦と推測されよう。

大城山城の瓦は、平壤地域の高句麗瓦の全時期にわたる瓦を含んでいる。大城山城が、高句麗後期の全期間をつうじて王都を守る山城として存在し、修築が続けられて維持されていることが瓦の様相からも支持できる。

大城山城については、城壁にかんする報告が少ない、注目されるのは蘇文峰付近の城壁である(図 34-2~4)。すなわち、城壁が二重になっており、外側は整層積みであり、中間壁、とされた城壁は割石積みで、縦方向に溝を設ける特異な城壁である。この中間壁については、溝の機能などについて議論がある(田村 松波)が、築造の時期差をしめすのか、工程差をしめすのか、決め手はないものの、整層積み以外の積み方がみられることが注目されよう。おなじ大城山城では、ほかに整層積みの城壁は南門付近でも確認されており、(図 34-1)大城山の築造の年代的な上限が平壤遷都の 427 年にあること、また、先に検討した集安の山城子山城の整層積み城壁の年代が瓦編年 7 期を上限とすることを考え合わせると整層積みに先立つ積み方である可能性もあろう。ただし、この 2 種がはたして、時期差なのか、工程差にすぎないのか、は現状では判断できる材料がなく、これ以上の検討はできない。

(5)後期平壤城(長安城)

後期平壤城(長安城)は、平壤市街中心部に位置する。東北から西南に大きく蛇行する大同江の北岸に沿って築造された大規模な城郭であった。南から外城、中城、内城、北城、と分けて呼んでいる。城壁は 19 世紀初めまではかなり残っていたが、現在はかなり失われている(図 37)。

以下では、主として城壁を検討する。

城壁・門

長安城の立地は、外城から中城にかけては広大な平坦地で、その北、内城から北城にかけては小丘陵をとりこみ次第に狭くなる。このうち、外城には、条坊とみられる方格地割が中城域までつづく。関野貞は、外城と中城を隔てる城壁は、高麗時代の築造とみた。

関野は、城壁の下に高句麗時代の礎石があることをもあげ、中城がのちの築造であることを示した(関野 1928)。北朝鮮の見解は、当初、この説にしたがっていた(蔡 熙國 1964、1965)が、後に 4 区画すべてが高句麗時代の築造だという見解に変わった(崔 義林 1978)。

つぎに、城壁の検討に移る。

長安城の城壁には銘文のある石材が用いられており、刻字城石などと呼んでいる。刻字城石を検討した田中(田中 1985、1995)によると、銘文の分析により、それぞれのはまっていた城壁の築造年代、あるいは城壁の築造順序を推定した。城壁については、便宜上、A~F に分けて記述しているから、ここでもこれを踏襲する。

田中は、さらに、外城の条坊が中城壁をこえて北にひろがっていることをあげ中城壁のほうが新しいことを示した。中城も高句麗時代の築造とする見解もあるがやはり、条坊遺構と城壁の重複関係からみて、中城壁が条坊より後の築造であることは動かせない。

銘文城石の分析により、長安城の造営過程は、内城→外城→北城の順であることが明らかにされた(田中 1995)

王宮の位置については、古く、大戦前に関野が、「内城」に王宮を考えたほか「北城」に離宮を想定した(関野 1928)。関野の没後に、後期平壤城内は、いくつかの場所で、工事にとまらぬ不時発見を機におこなわれた発掘であった。このうち、万寿台付近では、石敷きをとまらぬ回廊の遺構(小礎石間の距離は 2m 前後)が、旧平壤神社前からは門址(床は方形切り石敷きで、門扉の礎石を残す。両側の壁には木柱の跡をとどめる。門道の幅約 4m)

が発掘された(図 42、小泉 1938)。いずれから大量の瓦が出土したが、未報告である。

第二次大戦以後、後期平壤城では、建物跡の発掘の情報には接していないが、城壁に関する調査が幾つかおこなわれており、『高句麗平壤城』(1978)および『高句麗の城郭』(2009)に成果がまとめられている。特に、城壁の立面図、断面図が公表されたことは意義が大きい(崔 義林 1978)。公表された城壁の立面、断面図をかかげる(図 38・39)。これを通覧すると、城壁は基本的に整層積みであり、高句麗時代以来の部分のみならず、高麗時代に築造されたと考えられる部分(F)も同様に整層積みであるから、築造にあたっては、古い時期の築造法を踏襲した、ということであろう。

内城の西壁については、第二次大戦前に断面図が作成されている(図 40)。これも石築であり、後期平壤城の城壁は基本的には石築であったようである。

後期平壤城の整層積みは、年代を考える点では、上限が 6 世紀後半であることは、先にみた集安山城子山城での検討と符合することも重要である。

(6)高句麗寺院址

ここでは、後期都城と密接にかかわる平壤地域の清岩里廃寺をはじめ、上五里廃寺、定陵寺のほか、関連資料として平壤地域以外の元五里廃寺、鳳山郡土城里廃寺についても述べ、都城と高句麗寺院跡をめぐる問題にふれる(註 2)。

高句麗への仏教は前秦からで、372 年のことと伝え、省門寺と伊弗蘭寺が創建されたとする(『三国史記』小獸林王二年条)。中期都城期のことになるが、集安での高句麗寺院址は明らかでない。このあと、393 年には、平壤に九寺がもうけられたこと(『三国史記』広開土王二年条)や、498 年金剛寺の創建を伝える史料(『三国史記』文咨明王七年条)がある。

高句麗寺院跡の発掘調査によって、伽藍配置のわかるのは、八角形建物を中心にした伽藍で、一般に一塔三金堂式伽藍とよびならわされており、ここでも便宜上使用する。ただし、八角形建物が塔であるか否か、また金堂とした建物の性格についても議論がある。

1)清岩里廃寺

平壤市街の北東約 3km、大同江北岸の清岩里土城内に位置する。1938 年、朝鮮古蹟研究会による発掘で、西南向きの八角形建物を中心に、その四方に建物をめぐらす伽藍が発見された(小泉 1940)。高句麗時代の遺構は、ほぼ同じ位置で重複する上層の高麗時代の遺構により破壊が著しい。

八角形建物 基壇は、岩盤を削りだし、その周囲に割石を八角形(一辺 9.5m)にならべたものである。その外周を「基壇外帯」(幅 1.0m、がとりまく。基壇外帯には、柄穴をうがった切石による小礎石を間隔をおいて配置する。柱間数は、8 辺のうち東西南北の 4 辺が 5 間、そのほかの 4 辺が 4 間である。

北方建物 八角形建物基壇北端から約 14m 北に位置する。玉石敷きの雨落溝とその内側に柄穴をもつ小礎石(柄穴間の間隔 3.2m)を配した基壇外帯(西面での幅 1.2m)が見出された。基壇外帯の両端側は板石を立て並べる。基壇東西規模は、八角形建物中軸線を延長して折り返すと 33m ほどに復元できる。基壇外帯の各辺中央には階段が想定でき、四方に石敷きの通路がのびる。

東・西建物

八角形建物の東、西約 12m に南北棟建物がある。東建物は、割石を並べた基壇基礎と、柄穴をもつ礎石を配する基壇外帯、そしてその外側に雨落溝の一部を残す。西建物は雨落溝の一部を残す。両者は左右均斉の配置で、同一規模で復元すれば、基壇規模は南北 24m、東西 12m、基壇外帯の規模は、南北 26.5m、東西 12m、基壇外帯の規模は南北 26.5m、東西 14.5m となる。小礎石によれば、桁行は 7 間で、総長 23.48m、柱間は、両端間が約 2.7m、他 3 間は、各 3.6m ほどである。

南建物

八角形建物の南約 10m に建物基壇が数基重複している。高句麗時代の門、あるいは回廊がどれにあたるかは識別が困難であるが、このあたりに中門を想定できよう。

出土瓦

金銅楽天小像、忍冬文飾り金具などとともに瓦が多数出土した。瓦は、軒丸瓦、鬼瓦などの種類がある(図44)。

軒丸瓦は4種あり、数量的には、1が多く、2、3、4がそれにつぐ、という。

清岩里廃寺の本来の寺名については、発掘報告(小泉 1940)以来、文献史料にみえる497年創建の金剛寺にあてる考えが広く受け入れられている。

発掘報告のあげる根拠としては、文献史料(『三国史記』高句麗本紀文咨明王7年<497>の「秋七月創金剛寺」および『新增東国輿地勝覧』、『高麗史』など)および現地の地名(金剛灘ほか)などである。本遺跡の状況からみて、本遺跡が史料にみえる高麗時代の金剛寺である可能性は高い。高句麗時代の寺名は不明とせざるをえない。

2) 上五里廃寺

清岩里廃寺の東南約2kmの大同江北岸にある。

1939年、朝鮮古蹟研究会により発掘され、1940年に概要が紹介された(斎藤 1940)が、当初予定されていた翌年の調査が実現されないままで、報告書の刊行も中絶した。太戦後調査員であった斎藤 忠によって、遺構実測図が紹介された(斎藤 1976)。

八角形建物は一辺約8m、外縁をそろえた川原石を4列ほどに敷いたもので、写真によると雨落溝のようにも見える。その内部には切り石を立て並べた方形の区画(南北約11m、東西約10m)がみられる。基壇南・北辺には石の切れているところがあって、階段が想定され、東・西辺中央から板石を敷いた通路が東建物、西建物にのびている。

瓦は20種類あり、高句麗時代の特色を備えていると述べるが、図示がなく、内容を具体的に知ることはできない。参考として「上五里」採集の瓦をあげておく。瓦編年からは、6期に属する。上五里では、この廃寺以外に遺跡は知られておらず、この資料が上五里廃寺の瓦である可能性はあるが、判断できない。

3) 定陵寺

平壤の南約20kmに位置する。大戦後の発掘で最も注目される寺院の発掘である。一塔三金堂とされることもあるが、東西の金堂の規模、配置は対称ではない。中金堂とのあいだには回廊が通る点も他の高句麗寺院には例がない(図46、金日成総合大学考古学出版社 1976)。出土瓦は多く軒丸瓦は21種におよぶ(図47・48、表4)。

4) 鳳山郡土城里廃寺

黄海北道鳳山郡土城里廃寺では、残りは良くないが、清岩里廃寺に似た伽藍配置が想定される(図44、ナムイルリョン 1987)。瓦は図示されているのは1種のみ(図44-8)。類例には、平壤土城里からの採集品があり、同範かと思われる(朝鮮総督府 1915)。時期は、おそらく6期以降であろう。高句麗寺院と都城との関係で、清岩里廃寺を中心に指摘しておく。遺跡、遺物からみた清岩里廃寺の特色は以下の点があげられる。

①伽藍は土城内に存在する例は、清岩里廃寺のみである。

②八角形建物とその両側(東、西金堂と仮称)、および後方の建物(中金堂と仮称)の規模と配置を比較すると、清岩里廃寺が規模において突出する。

③出土瓦からみると、清岩里廃寺の瓦が5期に限られ、その後の瓦がない。

①に関しては、かつて筆者は、王宮と寺院が同一土城の中にあることを問題にしたことがある(千田 1983)が、これに対して、特異なことではない旨の指摘もあった(田中 1995)。本研究では、王宮と寺院が同一の区画内に併存するあり方を高句麗後期都城における特質

の一つとして、再度確認しておく。

王都と寺院の位置関係に言及する。高句麗後期平壤城で外城内に1箇所、唐新羅連合軍の平壤攻撃に際して、「羅郭」内の「空寺」の存在を記録している(『資治通鑑』)。また北城には、李朝時代創建の永明寺境内に、石獅子彫刻が高句麗時代の寺院のものかと推定されている。これが寺院であれば、後期平壤城内に2箇所の寺院が存在することになる。

以上、桓仁地域、集安地域、平壤地域の都城関係遺跡を検討してきた。瓦編年からみた各都城関係遺跡の年代は表5にしめた。

註

1 余昊奎 は城内の遺構分布を、現在の道路を基準に12区分した(余 2012)が、中軸線上の遺構群が分断されることになるから、筆者はこれより少ない9区分で検討した。

2 高句麗寺院跡を総括的に扱った論文には、田村晃一(1983)、千田剛道(1993)、田中俊明(1995)などがり、近年では梁正錫(2005)があつかう。

参考文献

<日本語>

- 朝鮮総督府 1915 『朝鮮古蹟図譜 二』 朝鮮総督府
関野 貞 1928 「高句麗の平壤城及び長安城に就いて」『史學雜誌』39-1
朝鮮総督府 1929 『高句麗時代之遺蹟 圖版上册』(古蹟調査特別報告第七冊)
池内 宏 1938 「山城子山城一丸都山城址」『通溝 卷上』日滿文化協會
小泉顯夫 1938 「平壤萬壽臺及其附近の建築物址」『昭和十二年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会
斎藤 忠 1940 「彙報 昭和十四年に於ける朝鮮古蹟調査の概要—平壤大同郡林原面上五里高句麗建築址の調査—」『考古學雜誌』30卷1號
小泉顯夫 1940 「平壤清岩里廢寺址の調査(概報)」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会
永島暉臣慎 1981 「高句麗の都城と建築」『難波宮址の研究』(第七、論考編)
千田剛道 1983 「清岩廢寺と安鶴宮」『文化財論叢』
千田剛道 1985 「平壤安鶴宮遺跡の基礎的検討」『日本原史』吉川弘文館
田村晃一 1988 「高句麗の城郭」『百濟研究』19輯(のち田村2001『楽浪と高句麗の考古学』同成社に収録)
武田幸男 1989 「丸都・国内城の史的位罫—所在論から歴史論への試み—」『高句麗史と東アジア—「広開土王碑」研究序説—』岩波書店
李 殿福 a(西川 宏訳)
1991 「高句麗山城の構造と変遷」『九州考古学』66号
李 殿福 b(西川 宏訳)
1991年『高句麗と渤海の考古と歴史』学生社
田中俊明 1995 「前期・中期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』(東潮・田中俊明編著)中央公論社

- 田中俊明 1995 「高句麗の寺院」『高句麗の歴史と遺跡』
- 松波宏隆 1998 「高句麗山城の構造と特質」(彙報 朝鮮学会第四十八回大会報告)
『朝鮮 学報』166輯
- 田中俊明 2009 a 「朝鮮古代都城と中国都城」『都市と環境の歴史学』2集 中央大学東
洋史学研究室
- 田中俊明 2009 b 「高句麗」 「丸都」 「『魏志』東夷伝訳註初稿(1)」『国立歴史民俗博物
研究報告』151集
- 千田剛道 2010 「高句麗瓦研究の二、三の問題—清岩里土城の瓦と平壤地域の瓦編
年」『第32回 東アジア古代史・考古学研究会交流会 地域発表及び初
期須恵器窯の諸様相—予稿集—』(註18)、大阪朝鮮考古学研究会
- 田中俊明 2011 「日本・朝鮮の軍事遺跡」『律令国家と東アジア』(日本の対外関係 2)
吉川弘文館
- 千田剛道 2011 「高句麗都城研究と平壤安鶴宮遺跡」、『近畿大学文芸学部論集「文学・
芸術・文化」』22巻第2号

<朝鮮語 韓国語>

- 蔡 熙國 1957 「平壤附近にある高句麗時代の遺蹟—高句麗平壤遷都 1530 周年に際して
—」『文化遺産』1957-5
- ファン・ウク
1958 「平壤<<清岩里土城>>附近で発見された高句麗金銅遺物」『文化遺産』
1958-5
- 蔡 熙國 1957 「平壤附近にある高句麗時代の遺蹟—高句麗平壤遷都 1530 周年に際して
—」『文化遺産』1957 年 5 号
- 蔡 熙國 1963 『大城山—平壤城』朝鮮労働黨出版社
- 蔡 熙國 1964 『大城山—帯の高句麗遺蹟に関する研究』(遺蹟發掘報告 第9集)社會科
學院出版社
- 金日成総合大學考古學・民俗學講座
1973 『大城山の高句麗遺蹟』金日成総合大學出版社
- 社會科學院考古學研究所
1975 『高句麗文化』社會科學出版社
- 社會科學院考古學研究所
1977 『朝鮮考古學概要』科學、百科事典出版社
- 崔 義林 1978 『高句麗 平壤城』科學、百科事典出版社
- 社會科學院歴史研究
- チョン・ジェホン
1985 「安鶴宮遺跡に対する研究」『高句麗歴史研究 安鶴宮遺跡と日本にあ
る高句麗関係遺蹟遺物』金日成総合大學出版社
- 朴 銀卿 1988 「高麗瓦当文様の編年研究」、『考古歴史学志』4輯、東亞大学校博物館、
- ナム・イルリョン、キム・ギョンチャン
1998 「清岩洞土城について(1)」『朝鮮考古研究』1998-2
- ナム・イルリョン、キム・ギョンチャン
2000 「清岩洞土城について(2)」『朝鮮考古研究』2000-1
- リ・グワンヒ
2004 「清岩洞土城から新たに発見された軒丸瓦の年代」『朝鮮考古研究』
2004-1

- 梁 正錫 2005「高句麗の寺院」『한국의 Global Pride 고구려』高麗大学校博物館
韓國考古學會
2006『韓國考古學講義』韓國考古學會
- 白 種伍 2006『高句麗瓦の成立と王権』周留城出版社、
- 金 性泰 2007「高句麗の武器、武装、馬具」『高句麗の文化と思想』東北亜歴史財團
- 崔 承澤 2009「清岩洞土城」社會科學院考古學研究所『朝鮮考古學全書 27 高句麗の
城郭』(中世編 4) (株)ジンインジン
韓國考古學會
2010『改訂新版 韓國考古學講義』韓國考古學會
- 姜 賢淑 2010「中國吉林省集安東台子遺蹟再考」『韓國考古學報』75
- 梁 銀景 2011「高句麗清巖里土城周邊出土金銅冠の系譜と用途」『東北亜歴史論叢』
34
- 余 昊奎 2012「高句麗国内城地域の建物遺跡と都城の空間構造」『韓国古代史研究』
66
- < 中国語 >
- 李 殿福 1982「集安高句麗山城子山城調査與考略」『文物考古匯編』1 期 吉林省文物
工作隊
吉林省考古研究室・集安縣博物館
1984「集安高句麗考古的新收穫」、文物』1984 年 1 期
1984「集安高句麗國內城址的調查與試掘」『文物』1984 年 1 期
- 林 至徳・耿 鐵華
1985「集安出土の高句麗瓦當及其年代」『考古』1985-7
- 魏 存成 1985「高句麗初、中期的都城」『北方文物』1985 年 2 期、
- 賈 士金 1988「集安の歴史文物と高句麗遺跡」『好太王碑と高句麗遺跡—四、五世紀の
東アジア—』(王 健群・賈 士金・方 起東著) 読売新聞社
孫 仁杰 1993「高句麗串墓的考察與研究」『高句麗研究文集』延辺
大學出版社
- 董 峰 1993「國內城中新發現的遺迹和遺物」『高句麗研究文集』延辺大學出版社
- 李 殿福 1994「高句麗的考古學」『東北考古研究 (二)』中州古籍出版社
- 魏 存成 1994『高句麗考古』吉林大學出版社
- 魏 存成 2002『高句麗遺迹』文物出版社
- 李 新全 2003「高句麗初期都城考」『遼寧考古文集』遼寧民族出版社
吉林省文物考古研究所・集安市文物保管所
2003「吉林集安高句麗國內城馬面址清理簡報」『北方文物』2003 年 3 期
吉林省文物考古研究所・集安市博物館
2004『丸都山城—2001~2003 年集安丸都山城調査試掘報告』文物出版社
吉林省文物考古研究所・集安市博物館
2004 年『國內城 2000~2003 年集安國內城與民主遺址試掘報告』文物出版社
吉林省文物考古研究所・集安市博物館編
2004『集安高句麗王陵 1990—2003 年集安高句麗王陵調査報告』文物出版社
- 王 飛峰・夏 增威
2008「高句麗丸都山城瓦當研究」『東北史地』2008 年 2 期
- 李 新全 2012「高句麗早期遺存研究」、『慶祝宿白先生九十華誕文集』科学出版社、

終章—結語

本研究の成果をまとめ結語としたい。

高句麗都城の研究では、現在、高句麗都城各時期の様相、ひいては全体像について、大きな見解の相違がある。その主たる要因に遺跡、遺物の年代観の問題が横たわっている。このような認識にたつて、本研究では、まず、中、後期都城遺跡において普遍的に出土する遺物として年代の基準となる瓦の編年研究に力点をおき、新たな編年案を構築し、考察の基礎に据えた。瓦の存在しない前期については土器の年代観によって検討した。

瓦の編年は、集安地域では、卷雲文瓦当期から蓮花文瓦当期にかけて、平壤地域では、蓮花文瓦当の変遷を指標に、地域ごとの編年を組んだ。この両地域の編年を総合して、高句麗瓦編年として、4世紀前半から668年の滅亡までの大別7期の編年を構築し、各時期の年代を推定した。

以上の基礎にたつて、高句麗都城を構成する王宮の所在する平地城と逃げ城としての山城の様相を時期ごとに検討した結果は次のとおりである。

平地城と山城とからなる高句麗都城の基本的な構成は、前期で確立していることはほぼ確実である。桓仁五女山城の頂部の平坦地には、少数の礎石建物、オンドルをともなう多数の竪穴住居、武器を蓄えた穴蔵などがあり、飲料水を得るための池をともなっている。瓦は存在しないものの、これらの遺構の出土土器は周辺の高句麗前期の積石塚古墳出土土器と共通の様相をしめすから、五女山城が前期に始まる城であることは動かない。ただ、麓に部分的に設けられた石築城壁は、後述する集安山城子山城の検討で明らかにした城壁型式の年代観を援用すると、6世紀半ば以降の築造である。頂部の多数の竪穴住居の大部分は出土土器の年代観からも、この石築城壁の築造年代に近い年代と推定できる。

前期の王宮は候補地の平地城が2箇所ある。そのうち五女山城の東側、現在ダムに沈んでいる蜷蛤城が有力とみる。もう一つの候補は、五女山城の西側に位置する下古城子土城で、従来、この城を前期の王宮とみる研究者も多い。下古城子土城については、近年の発掘によって城壁下層の土坑から高句麗初期の土器が出土し、この土城の初築が高句麗時代以前には遡らないことが明らかになったことは重要である。城内からは高句麗時代の土器も多数採集されているから、この城が高句麗時代に存在したことは疑いない。ただし、前期都城を構成する平地の王宮をこの城に当てるについては、その位置関係から否定せざるを得ない。下古城子土城については、都城の中枢部の周縁に築造された城郭として、新たな位置づけが求められることになった。

中期都城では、まず、平地城として4世紀代からの瓦が出土する通溝城がある。通溝城の石築の初築年代はなお明らかでない。城壁の断面調査で、石築城壁の下層に土築城壁の存在が確認され、漢代の玄菟郡下の県城と見る解釈がなされてきている。方形土城は下古城子土城にみるように、高句麗時代に存在している。通溝城の土築城壁の初築が高句麗時代に降る可能性も出てきたと考える。土城の一辺約600メートルというのは、漢の県城の一般的な規模から見ると格段に規模が大きいことの解釈にもつながるであろう。

通溝城には王宮が設けられたと考えるが、なおその遺構は明らかでない。ひとつの手がかりとして城内における4世紀代の瓦の分布をみると中央南よりに顕著で、そのあたりが王宮の所在地の可能性が推定できるととどまる。通溝城内の瓦は4世紀代のあとは、6世紀代以降に限られる。城内でこれまで、石敷の溝をとまなう建物跡などが知られているが、いずれも断片的な検出にとどまり、また時期を限定できる資料はとぼしい。

平地の通溝城とセットになる山城は山城子山城である。従来、中期の山城とされてきた山城子山城は、現存の石築城壁や、城門、そして「瞭望台」とその背後の礎石建物、「宮殿址」など城内の主要施設の築造が伴う瓦の年代を媒介にするといずれも6世紀半ば以前には遡らない。文献史料によると、高句麗王都は、3世紀代に魏、4世紀代に前燕の攻撃により、壊滅的な打撃を受けている。その際の王都には山城が含まれていることが想定されてきた。しかし、山城子山城では、3, 4世紀代はもとより5世紀代の土器なども知られておらず、中期都城期の山城子山城の状況については、城壁の様相も含めて、現状の考古学的資料からは不明とせざるを得ない。この問題にかんしては、城内に分布する未発掘の古墳群の存在が手がかりの一つになると考え、現状からいくつかの推測を示した。

後期は、前期平壤城(427～586年)と後期平壤城(586～668年)に細分される。前期平壤城の王宮については、平地城である清岩里土城と考え、城内に王宮の存在を推定し、王宮の建築は瓦葺きでない可能性をも示した。清岩里土城内には瓦葺きの仏教寺院(清岩里廢寺)が併存していることも特異な点として指摘できる。

前期平壤城の王宮には、従来、大規模な宮殿風の遺跡が発掘された安鶴宮遺跡をあてる見解も根強い。しかし、この遺跡の建築群に伴う瓦は高麗時代に降るものであって、高句麗都城ではありえない。また、安鶴宮遺跡の前方に壮大な条坊区画を想定する説についても、考古学的な根拠はない。安鶴宮遺跡を前期平壤城王宮として、方形の宮城を中期通溝城からの系譜とみて、さらに渤海都城へ継承されたとする見方は成り立たない。

後期都城の山城としては、大きな谷を取り込み、城内に多数の池を擁し、全体を城壁で囲む大城山城が遷都時から高句麗滅亡まで存続していることは瓦からも明らかである。後期平壤城では、現在の平壤市中心部にいくつかの小丘陵をとりこむ山城的部分と条坊をもつ広大な平坦地を含めて全体を城壁で囲む大規模な城郭を新たに築造する。王宮は小丘

陵の平地部分に想定され瓦、礎石の存在が知られる小丘陵に推定されるが、未発掘であり、王宮の様相は不明のままである。条坊の採用は従来から説かれているように、中国都城の直接的な影響によるものであろう。

本研究はこのような特質をもつ高句麗都城の研究に考古学的な面からひとつの確実な基礎を提供できたと考える。